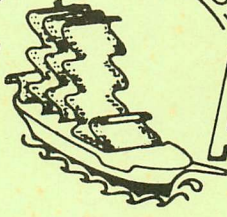


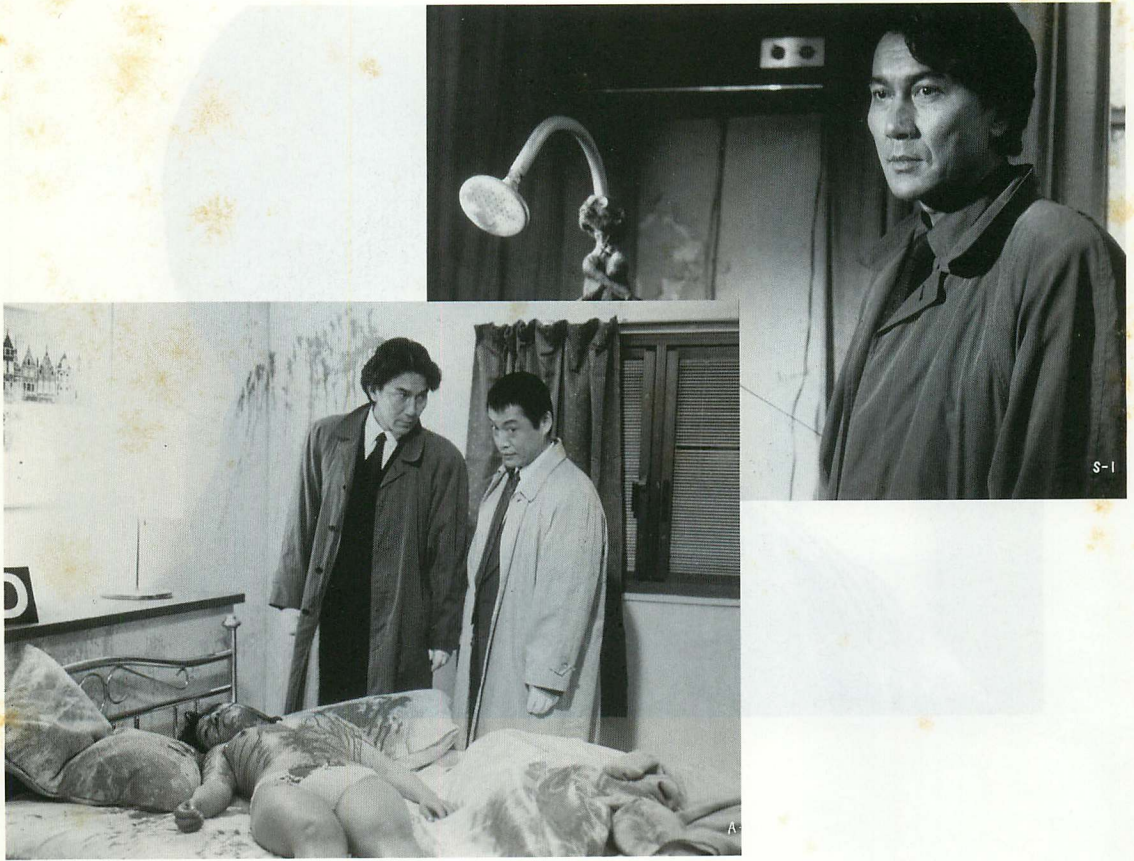
第20回

映画ファンのための熱いまつり

ヨコハマ 映画祭



● THE 20th YOKOHAMA FILM FESTIVAL



作品賞 「CURE キュア」

製作：大映株式会社

配給：松竹株式会社 松竹富士株式会社

製作：加藤博之

監督・脚本：黒沢 清

撮影：喜久村徳章

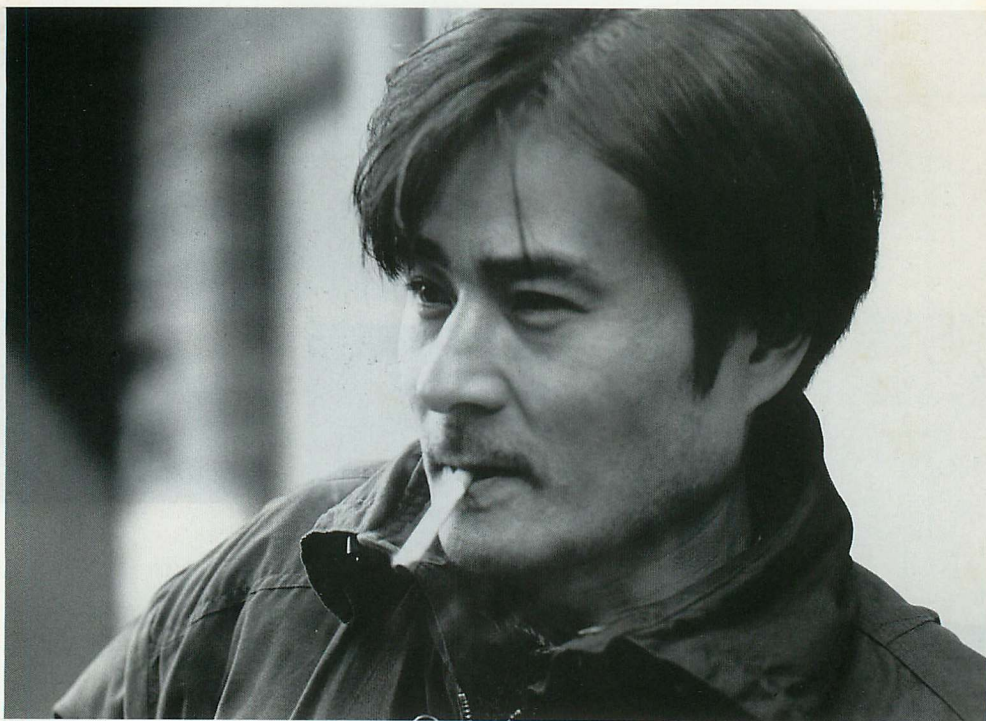
出演：役所広司、萩原聖人、うじきつよし、
中川安奈、大杉 漣

第20回という大きな節目の回に荣誉ある作品賞をいただいた事、大変うれしく思い、かつ感謝しております。

企画立案から成立まで困難のあった作品ですが、このように映画を愛する人達に支持していただき、今後の励みにしたいと思います。

黒沢清監督をはじめ、スタッフ、キャストの皆様にも重ねて感謝いたします。

大映株式会社 企画製作一部
プロデューサー 土川 勉



監督賞 黒沢 清 (「CURE キュア」)

私はこれまで、何度も横浜で映画を撮ったことがあります。で、告白しますが、なぜか人に聞かれるといつも「東京で撮った」と答えていたのです。はっきりした理由があるわけではありません。なんでロケ現場に横浜を選んだの?と聞かれてもうまく答えられないし、東京都と神奈川県の間目にもうとい私は、まっどうせ東京の近くさ、ぐらいに考えてタカをくくっていたのです。

そんな横浜から賞をいただきました。こんなの初めてです。ありがとうございます。そして、深く恥じ入りました。今後、横浜で撮った映画はちゃんと胸を張って「横浜で撮った」と言うことにしますから。



監督賞 磯村 一路（「がんばっていきまっしょい」）

さすが、ヨコハマ！長年のベイスターズファンとしては優勝と共に監督賞は二重の喜びです。但し監督賞は全てスタッフ、キャストのおかげです。皆喜んでくれると思います。これを機に「がんばっていきまっしょい」が再び横浜の映画館で公開されるといいんですが……。

思い起こせば私のデビュー作は、もう20年も前になりますが、横浜でロケーションしたものです。その後も何度かその風景にはお世話になったものです。

改めて、ヨコハマ映画祭と横浜の街に感謝します。



新人監督賞 庵野 秀明 (「ラブ&ポップ」)

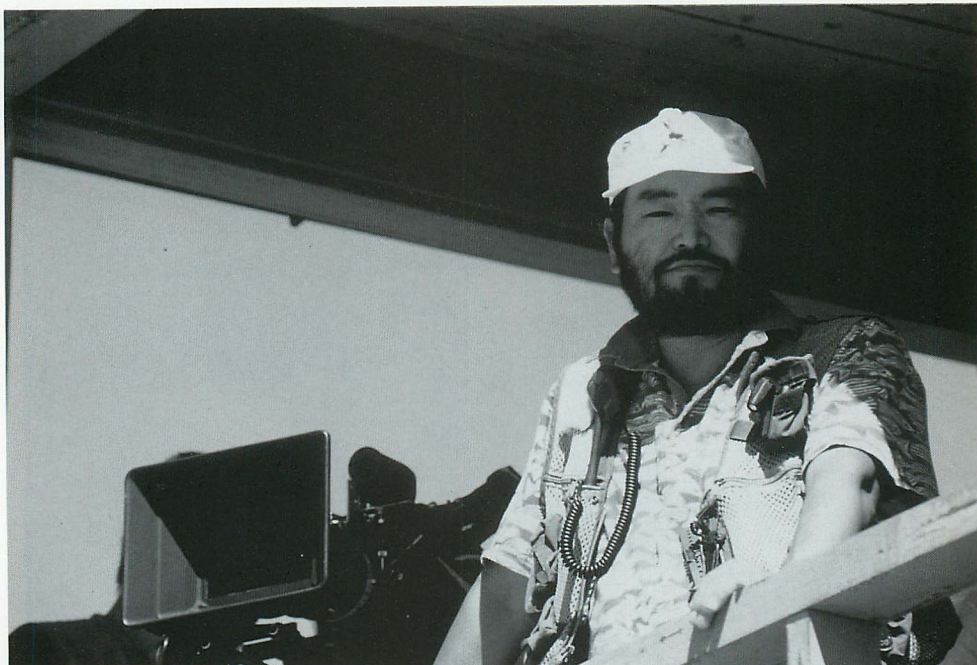
どうもありがとう

ございました。



脚 本 賞 君 塚 良 一 （「踊る大捜査線 THE MOVIE」）

おもしろい映画が大好きなスタッフが集まって、
「映画みたいなテレビドラマを! 」と作り始めたこの作品。
それを、映画化することになり、今度は、
「テレビドラマみたいな映画を! 」と思って、作りました。
それが映画ファンの皆様に、おもしろいと言われ、
とても、うれしく思っています。
ありがとうございました。



撮 影 賞 長 田 勇 市 (「がんばっていきまっしょい」)

「この作品で撮影賞をとらせてあげるよ」と、磯村監督はクランクインまえから言っていた。

磯村監督とは1976年からの付き合いである。同年代であり、監督第一回作品からこの作品まで、約20本の作品を担当した。

「映画は絵だよ」と言うのがいつもの口癖である。本当はカメラマンに成りたかったようだ。「お互いに歳をとったなぁ！」と腹を見ながらお酒を飲んでた。分宿であったが、監督とは同室で、オープンセットには自転車でかよった。「鉄壁なカット割りだ」と言って二人で、インするまえには出来ていた。それは仕事をするのが、お互いあまり好きでないので早く終わりたいためであるが……。

前回の『目を閉じて抱いて』の時、カット割を箱根の温泉ですることにしたが、酒を飲んで出来ずに帰った……。それ以来カット割りをするのを止めた。今回も最後のレースシーン以外はしていない。これも助監督の要請によってで、撮影現場に行けば何となく決まるのである。ナイトシーンが少ないし、ネガフィルムを1/2減感しているので終了が早い、道後地ビールの「ぼっちゃん」を飲むのが楽しみであった。南の島の生まれなのだが、過去2回、船上撮影で船酔いで難儀している。撮影当日の朝に完成したカメラ船は8人乗りで波を立てず安定した走行をする。特機の露木くんの仕事で操縦も彼が担当した。昼食とトイレ以外は船上の日々が続いたが、娘達もよくがんばった。海上の撮影で1度だけ船酔いをして、助監督にアタッテシマッタが……。ある日、監督の奥さんとお母さんが、初めて撮影現場に見学に来た。短パンにビーチサンダルの格好「お袋に不謹慎だ！と言われたよ」とボヤクひとりっ子の監督。

映画には作者はいない

ただ重労働と一

多少の奇跡があるだけ

磯村監督は異論を唱えるけど、私は好きな言葉だ。

試写を見て「タイタニックよりよかったよ」と、ちょっぴり尊敬したのかマジ顔で言った11才の息子。

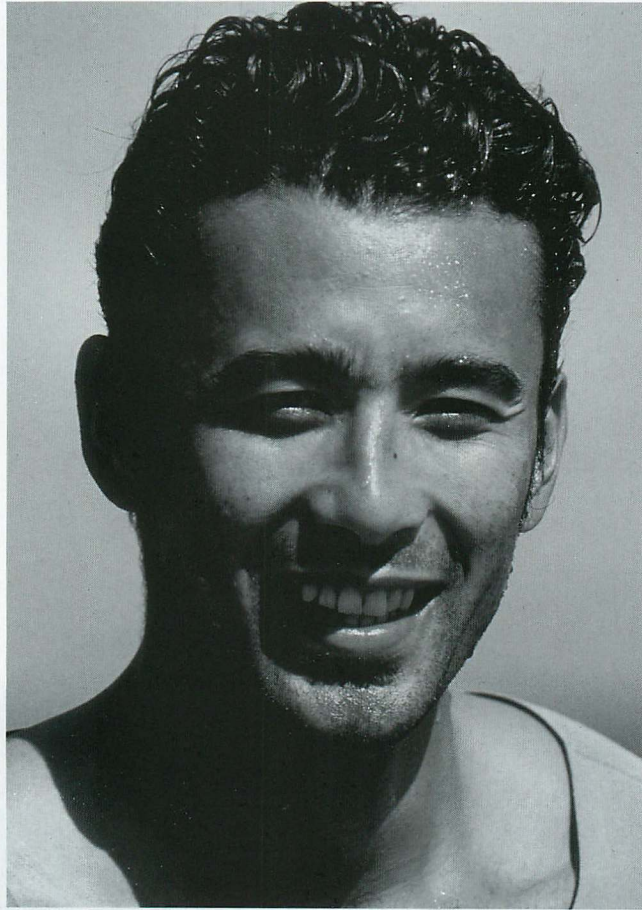


主演男優賞 中井 貴一（「ラブ・レター」「愛を乞うひと」）

映画を愛する

すべての人に

感謝です。



主演男優賞 真木 蔵 人（「愚か者 傷だらけの天使」）

映画にでれるだけで幸せなのに、又その映画で主役をはるのはもっと幸せなのに、今回ヨコハマ映画祭で、主演男優賞をいただけるとは、この世で一番の幸せ者です。

阪本監督を始めとする阪本組の皆さん、心から感謝します。そして今回僕を選んでくれたしまった横浜の映画の「愚か者」たち、ありがとうございます。この受賞を機に新たな気持ちで、新作に意欲的に取り組んでいきたいと思っています。



主演女優賞 原田美枝子（「愛を乞うひと」）

第20回ヨコハマ映画祭で、主演女優賞に選んでいただきまして、ありがとうございます。

平山監督と、全スタッフ・キャスト、それぞれが、映画というものを面白がりながら、最高の仕事をしたのだと思います。

そういう作品にめぐり逢えたことは、俳優として、とても幸運なことです。

『愛を乞うひと』は、私にとって、生涯忘れられない作品になるだろうと思います。



助演男優賞 大杉 漣 (「CURE キュア」「愚か者 傷だらけの天使」
「がんばっていきまっしょい」「HANA-BI」
「犬、走る DOG RACE」ほか)

第20回 ヨコハマ映画祭、おめでとうございます！

1988年、転形劇場が解散してぼくはひとりになった。表現の背後には、いつも集団が付き添っていた。集団だからこそ実現出来た事が、たくさんあった。しかし、不安より気楽が勝っている、そんな気持ちだった。目的とか決意とか夢……そんな願いからは、いちばん遠い場所から出かけていこうと考えた。“無防備に生きる”……顔を上げたらく俳優でしかない中年男がそこにいた。

そして、映画があった。劇団という集団の形が“組”になった。仮想家族のような映画の組が、取りあえず、ぼくを生かしてくれている。ぼくは数多くの仮想家族の住人に感謝しなければ……ここまで書いたところで洗濯機が回っている音に気づいた。奥から「この先どうなるかなんてわからないわよ」女房が言った。一番のリアリズムだと思った。タバコを吸う、気づかれぬようにそっと呼吸を整えようとしていた。



助演女優賞 吉行由実（「D坂の殺人事件」
「大怪獣東京に現わる」）

うれしくて、うれしくて、胸がいっぱいです。

素晴らしい作品に出会えて良かったと心から思います。

私を選んでくれたヨコハマ映画祭の皆さん、

本当にありがとうございます。

元気が出ます。

これからも映画を愛していきます。



最優秀新人賞 **田中麗奈**（「がんばっていきまっしょい」）

初めての映画で、しかも私がこれから女優としてやっていくための土台を作ってくれたこの作品でこのような素晴らしい賞を頂けたこと、感激しつつも正直とまどっています。

磯村監督をはじめスタッフの方々に守られながら、私も何とかやってこれたということを思い出すと、皆さんに何とお礼を言ったら良いかわかりませんが、これからも精一杯がんばりますので、よろしくお願いします。

本当にありがとうございました。



最優秀新人賞 麻生 久美子（「カンゾー先生」）

「カンゾー先生」の完成後に初めてカンヌ映画祭に参加させていただいて、あの時はもう夢みたいで、この私が赤じゅうたんを歩いてるって、もの凄く感動しました。こういうチャンスを与えてくれた今村監督には本当に感謝しています。今回の作品で映画の素晴らしさ、演じることの面白さを監督に教わって、前よりも強く映画女優として、これからいつも成長して、常に興味や、関心を持ってもらえる様な女優を目指していこうと思います。

最後に、スタッフ・キャスト・ヨコハマ映画祭の皆様、この新人賞を励みに頑張っていこうと思います。本当にありがとうございました。



最優秀新人賞 三輪 明日美（「ラブ&ポップ」）

ヨコハマ映画祭20周年おめでとうございます。

一生に一度しかもらえない賞を、私が生まれ育った横浜でいただくことができて、本当に嬉しいです。

私にいろいろな、素晴らしい経験をさせてくれたこの作品、自分自身を大きく成長させてくれたこの作品でこの賞をいただけたこと、私を見出し、支え、励ましてくれた庵野監督をはじめ多くのスタッフ・共演者ならびに関係者の皆さんに感謝致します。本当に有り難うございました。



審査員特別賞 「踊る大捜査線 THE MOVIE」の製作チーム

映画人に無視されないよう頑張ってきました。

“映画館で眠らず、死ぬほど勉強しておいて良かった”
です。

プロデューサー 亀山千広



審査員特別賞 前田陽一 (帰らぬ人となった反マジメ派の永遠の鬼才に映画ファンより心から哀悼の意を表して)

第5回目に特別大賞を戴き、今回は本人が不在になりました。
ビデオ用映画「新・唐獅子株式会社」を楽しみにしていました。
劇場から遠ざかっていた為、関係者の方々には、多大な迷惑を御掛けしたのですが、忘れていた作品を思い出し、撮れることに夢中になり、他は何も観えなくなりました。

これからも、楽しい映画が多く製作出来る環境を願ってやみません。関係者の皆様方の御配慮、どうもありがとうございます。

前田 えつ子

第20回 ヨコハマ映画祭

平成11年2月7日(日) 関内ホール(大ホール)

AM 9:45 開 場

AM 10:15 特別招待作品プレミア上映
『大阪物語』(1999年陽春ロードショー)
スタッフ・キャストの舞台挨拶あり

PM 0:25 特別招待作品プレミア上映
『皆 月』(1999年ロードショー公開)
舞台挨拶あり

PM 2:45 最新作PRコーナー
最新期待作予告篇上映とスタッフ・キャストの舞台挨拶

PM 3:15 個人賞表彰式

PM 5:00 『がんばっていきまっしょい』
ベストテン2位、監督賞、撮影賞、助演男優賞、最優秀新人賞

PM 7:10 『CURE キュア』
作品賞、監督賞、助演男優賞

1998年度 日本映画ベストテン

- 第1位 「CURE キュア」(黒沢 清 監督)
- 第2位 「がんばっていきまっしょい」(磯村一路 監督)
- 第3位 「HANA-BI」(北野 武 監督)
- 第4位 「愚か者 傷だらけの天使」(阪本順治 監督)
- 第5位 「愛を乞うひと」(平山秀幸 監督)
- 第6位 「犬、走る DOG RACE」(崔 洋一 監督)
- 第7位 「ラブ & ポップ」(庵野秀明 監督)
- 第8位 「リング」(中田秀夫 監督)
- 第9位 「踊る大捜査線 THE MOVIE」(本広克行 監督)
- 第10位 「中国の鳥人」(三池崇史 監督)
- (次点) 「ラブ・レター」(森崎 東 監督)
- (次点) 「キリコの風景」(明石知幸 監督)

第20回 ヨコハマ映画祭

ヨコハマ映画祭実行委員会

1998年度《個人賞》

- 作品賞 「CURE キュア」
(製作：大映株式会社 配給：松竹株式会社、松竹富士株式会社
製作：加藤博之 監督・脚本：黒沢清 撮影：喜久村徳章
出演：役所広司、萩原聖人、うじきつよし、中川安奈)
- 監督賞 黒沢清 (「CURE キュア」)
磯村一路 (「がんばっていきまっしょい」)
- 新人監督賞 庵野秀明 (「ラブ & ポップ」)
- 脚本賞 君塚良一 (「踊る大捜査線 THE MOVIE」)
- 撮影賞 長田勇市 (「がんばっていきまっしょい」)
- 主演男優賞 中井貴一 (「ラブ・レター」「愛を乞うひと」)
真木蔵人 (「愚か者 傷だらけの天使」)
- 主演女優賞 原田美枝子 (「愛を乞うひと」)
- 助演男優賞 大杉漣 (「CURE キュア」「愚か者 傷だらけの天使」
「がんばっていきまっしょい」「HANA-BI」
「犬、走る DOG RACE」)
- 助演女優賞 吉行由実 (「D坂の殺人事件」「大怪獣東京に現わる」)
- 最優秀新人賞 田中麗奈 (「がんばっていきまっしょい」)
麻生久美子 (「カンゾー先生」)
三輪明日美 (「ラブ & ポップ」)
- 審査員特別賞 「踊る大捜査線 THE MOVIE」の製作チーム
前田陽一 帰らぬ人となった反マジメ派の永遠の鬼才に映画ファンより心から哀悼の意を表して

祝 第20回 ヨコハマ映画祭

～映画人からのメッセージ～

企画運営のすべてを、映画を愛する“若いファン”の手によって行う「ヨコハマ映画祭」も、20才の誕生日を迎えました。ここまで来れたのも、なんの権威もない映画祭に快く出演して下さった受賞者の皆様、常に若々しい感性で「ヨコハマ」らしい作品を選びすぐって下さった選考委員の皆様、種々の面で支えて下さった横浜の映画興行界や文化人の方々、そして第20回のきょうも会場に来て下さった映画ファンのあなた、のご支援の賜と、深く感謝致します。

これからも「ヨコハマ映画祭」は、映画ファンのための熱いまつりを作り出します。

原 田 芳 雄

賑々しく喧騒むせる大通りからちょいと二筋三筋横丁に入ると、ふだんはかき消されてしまっている人の声や物音が生々しく聞こえてきてドキッとす。「コラ! どこにいくの」「スズムらくんち!」「ジュンジ! バカ! 何やってんのまた」「オレだけじゃねえよ。ハヤシくんだってやっているヨ!」どうやら危なっかしい自前のオモチャかかえて皆んな「スズムらくんち」に集まるらしい。「スズムらくんち」は創業20年の「手づくりそうざい屋」。時折漏れてくる悪ガキたちのはしゃぎ声を聞いているうち、なぜか脈絡もなく「そうだよなあ。ヨコハマ映画祭には一宿一飯のよしみがあるよなあ」としみじみしてしまった。

(俳 優)

水 木 薫

20周年おめでとうございます。横浜出身の私、20年前からファンでした。ずっと遠くからあこがれてました。

第15回の時、突然映画祭の方から近づいて来てくれて、知らない人たちに一生懸命ほめられました。嬉しかったあ。“人は報いられる瞬間があるんだ”そう実感したあの時から、ほんの少し前向きな自信と、映画の好きなお友達が増えました。ずーっと続けて下さいね。“励み”の素なんですから。

(女 優)

阪 本 順 治

20周年おめでとうございます。思い起こせば19年前、第2回目の映画祭でお手伝いさせて頂いたころ、いずれ自分がその舞台に立てる日が来るなどとは予想もしていませんでした。チンピラ学生だった私は、確かに映画監督を目指してはいたものの、ミーハー気分が抜け切れず、今から思えば、芸能界に憧れるだけの男だったかも知れません。そんな私をヨコハマ映画祭が育てて下さいました。心から感謝すると共に皆様の粘り強さには感服するのみです。これからも頑張ってください。

(監 督)

北 川 れい子

はじめに人ありき。

第20回を迎えた「ヨコハマ映画祭」を、幸運にも、その誕生から見続けてきた私は、つくづくそう思う。

いや、映画祭という主旨から言えば、主役は当然、その時代や年度の顔となる秀れた映画たちなのだろうが、しかし、どんなに祭りの主役が立派でも、率先して音頭をとる人がいなければ祭りは成立しない。

映画ファンのための熱いまつり「ヨコハマ映画祭」は、日本映画を愛してやまないとびきりのファンたちが、自分たちで祭りを立ち上げ、自分たちで祭りを実行してきたのが素晴らしい。スポンサーは抜きで、毎回、手弁当。費用はチケットの売り上げで賄うため、大赤字の年も何度かあった。

でも映画祭の代表の鈴木たけし氏以下、社会人

のくせに映画もお祭りも大好きな主要メンバーたちは、決して懲りない、諦めない。その点、私などはベスト10の投票に参加するぐらいで何のお手伝いもせず、要するにすっかり用意が整った映画祭のおいしいところだけ、つまみ喰いをしてきたのに過ぎないのだが、祭りを開くための苦労やトラブルはおくびにも出さず、いつも軽いフットワークでゲストの映画人を暖かく迎える彼らを見ると、この人たち、よっぽどお人好しか、おバカさんか、と、その無償の献身に胸が熱くなってしまう。

受け付けや接待その他、映画祭ごとに入れ変わり、また顔を見せる裏方のスタッフたちの離合集散も、中心のメンバーが不動だけにこれはこれで初々しい。

「ヨコハマ映画祭」が、はじめに人ありき、だと思ふのは、当然のことなのだ。

ところで鶴見駅の西口にあった京浜映画劇場で1980年2月3日に開かれた「第1回ヨコハマ映画祭」を思い出すと気分までピカピカしてくる。表彰式やゲストによる座談会を間に入れての上映作は「天使のはらわた／赤い教室」、「十九歳の地図」、「家獣」、そして「太陽を盗んだ男」だった。

「家獣」以外の作品はいまでも繰り返し語られている秀作だが、映画祭がスタートした当初、当時まだ少数派だった「自主製作映画賞」という部門があって、その最初の受賞者が、受賞後すぐの5月20日に34歳で亡くなった青山定次の16ミリ「家獣」だった。フリークス色の強い怪奇ホラーで、あゝ、思い出してきた。ウーン、不気味。

ま、ヨコハマ映画祭のメンバーとは、映画祭がスタートする以前から、折に触れて親しくさせて戴いていたので、その思い出や映画祭がらみのエピソードを書いていたらキリがないのだが、あくまでもファンという立場で映画祭を重ね、日本映画に熱いエールを送り続けるメンバーの方たちに、同じく日本映画を支持する一ファンとして、心より感謝を捧げたい。やっぱり人なのだ。

それにしても20年も続いたとは。映画のためならエンヤコラシヨの「ヨコハマ映画祭」なのよね。私も付いていこうっと!!

(映画評論家)

ここ数年映画祭と名のつくものがやたら目につくようになった。映画ブームならぬ映画祭ブームのようである。ヨコハマ映画祭やわがおおさか映画祭もその一翼を担っているわけだけど、数ある映画祭の中でもこの二つの映画祭はちょっと異なるスタンスにあるようだ。

行政主体の映画祭が多いなか、この二つは映画ファンの手で自主的に運営されている映画祭である。しかもヨコハマが今年で20周年、おおさか24回目と歴史は古い。映画ファン(選考委員)でベストテンや個人賞を選び表彰し、映画ファンと映画人が交流する映画のお祭りというスタイルも同じである。しかも選考結果も毎年よく似たものになっている。

過去のベストテンを眺めてみると、それぞれの特色はあるものの、そこにうかがえるのは独断と偏見にみちた映画への異常なまでの愛情であり、映画ファンとしての心意気である。

しかし、一方で映画をとりまく状況もすっかり様変わりし、初期の映画青年たちも生活に追われ、映画祭自体も苦戦を強いられているのも事実である(特におおさかの場合)。

でもそうはいいながらも毎年映画祭の季節が迫るとやおら重い腰をあげ走り出すことになる。

私は途中からバトンタッチされた立場だけど、鈴木さんは休むことなく走り続けてこられて20年。時に連絡を取りあい、励ましあったり愚痴のひとつもこぼしあったりしているけれど、その熱意や人知れぬご苦労には本当に頭の下がる思いで一杯だ。ヨコハマ映画祭の存在がおおさか映画祭にとっても大きな励みになっていることも見逃せない事実である。

少しだけ先輩であるおおさか映画祭から心をこめて……20周年おめでとう! これからもお互い“がんばっていきまっしょい”。

(おおさか映画祭実行委員長)

金子 正 且

ヨコハマ映画祭もなんと第20回を迎えることになりました。鶴見の京浜映画劇場で第1回を開催してから、足かけ20年の歳月がたったのです。小さな蕾の花から始まって、それを見事な大輪の花に育てあげた映画祭代表以下実行委員会の皆さん

の熱意と努力には讃歎の念を禁じませんが、しかしそれを年行事の義務なんて思ってやって来た人は一人もなくて、みんなもう映画が好きで好きで、映画にたずさわる人々すべてに心からの熱いエールと感謝の念を捧げたい、その一心で今日までやって来たものと信じて居ります。我々の愛する日本映画に旗を振り続けて来て20年たったと思います。第1回から20回まで、ヨコハマ映画祭で受賞された多勢の映画人の方々の、その後の活躍ぶりには心おどらせ、又しばらくの沈黙にはどうしたことだろうと心配する、まったくファン気質丸出しの一同ですが、考えてみれば日本映画もどんどん変わってきました。20年の間に、我々の生活する気持ちも変り、社会も変り、日本も変りました。映画が変るのも当たり前です。昔の名作は貴重な文化遺産として大切にいつまでも保存し、そこから多くの教えも受けなければなりません、老いも若きも生きている今の時代の我々に提供される今日只今の映画、その素晴らしさを認めることもファンとしての義務ではないでしょうか。第1回から20回までのヨコハマ映画祭にもそのことは色濃く反映されている、と私は確信します。第20回は確かに一つの節目にはなりますが、それはあくまでも主催者の気持ちの上での節目でありまして、ヨコハマ映画祭はこの先も第21回、22回と回を重ねる運命にあると思います。日本映画と運命共同体の映画祭です。皆様の熱烈な御支援を切にお願いいたします。

(ヨコハマ映画祭審査委員長)

金川 真由美

「映画ファンです」と名乗る人がいたとする。この場合は大抵が“洋画”であることが多い。「洋画ファンです」と言い直してもらいたいものだ。どことなく(一部の例外を除いて)冷遇されている日本映画。<ハリウッド映画>はハリウッドに任せておけばよい(当たり前ですが)。日本料理が体に一番いいように、映画も同様。日本映画を守護せん、と惜しみない愛を注いで、もうの20年、まだの20年。心からのエールをおくります。

(「RAYON」誌編集長)

林 海 象

横浜の映画狂、鈴木、北見両氏が全時間・全財産・全生命を捧げる『ヨコハマ映画祭』は、映画を撮る、観る双方が、映画に目がくらむことのできる『黄金の映画祭』である。その映画祭が20周年を迎えたということは、金でいうなら20金。純金まで、あと4年。鈴木、北見両氏の苦難はさらに続くが、純金となった黄金は不滅の輝きをもって、両氏の労に永遠に報いるに違いない。『ヨコハマ映画祭』よ、永遠なれ!

(監督)

荒井 晴彦

みんな、ヨコハマ映画祭がセケンへのスタートだった。丸山昇一がもらい、俺もと思い、俺がもらって、斎藤博もよしっと思い、斎藤がもらって、丸内敏治もいつかはと思い……みんな、初めてもらう脚本賞だった。ジイサンが多いキネ旬は遠いけれど若手のヨコハマは近い、という希望だった。そして、20年、若手もいまやジイサン、バアサン。願わくは反権威が権威になってしまわぬように精神の「若手」の持続を! まずヨコハマからという夢をいつまでも!

(脚本家)

野村 正 昭

薬師丸ひろ子さん(主演女優賞)と萩野目慶子さん(新人賞)が、楽屋で仲良さそうに話しているのを記憶しているから、あれは第2回目のことだったのか。会場は今亡き京浜映画劇場で、出番寸前に舞台袖で相米慎二監督(新人監督賞)がひろ子さんに「落ち着け」と言っていたのも思い出す。その第2回の舞台上で初めて僕は「翔んだカップル」のふたりに花束を渡し、祝辞を述べたが、一番あがっていたのは僕だったのだろう。何を喋ったのかも、ろくに覚えていない。あれからもう18年も経ったのか。

ヨコハマ映画祭も、いよいよ20周年の節目を迎えた。鈴木さんや林さん、北見さんら実行委員の方々の愛情と努力と熱意で、ここまで続いた。この事実には改めて敬意を表したい。手許のパンフレットには、こう書かれている。“ヨコハマ映画祭は日本映画のおまつりです。横浜在住の映画ファンが中心となり、企画・運営のすべてを映画

を愛する若いファンの手によって行う映画祭です。選考委員は、若手映画評論家やファンX名で構成され、筋金入りの映画狂ばかりです”。この趣旨は現在まで立派に貫かれていると思う。選考委員の末席に名を連ねる僕は、もはや“若手映画評論家”とはいえず“中年映画評論家”になってしまったが、毎年、受賞式に立ちあう瞬間には、身体が引き締まり、少し厳粛で同時に楽しい気持ちになる。たぶん僕の中の“若い映画ファン”の血を刺激され、かきたてられるからだろう。ヨコハマ映画祭は今でも僕に心地良い緊張と大いなる興奮をもたらしてくれる。

受賞者の中には、現役を引退された方もいれば、故人も数多い。思い出は走馬燈のように脳裡を駆け巡る。第3回目に、会場の非常口から入ると、目の前に高倉健さん（特別大賞）が立っていて驚

いたこと。第5回目の時だったか、「家族ゲーム」のチームが受賞し、僕がそのパートの司会を務める直前に舞台裏で松田優作さん（主演男優賞）に挨拶すると、わざわざ立ち上がり「よろしくお願いします」と言われてしまって恐縮したこと。第13回目のパーティの席上で、風吹ジュンさん（主演女優賞）にパンフの原稿を賞められて、滅茶苦茶に嬉しかったこと。思い出を数えあげていけば、キリがない。たぶん実行委員の方々の思い出は、そのまま、ここ20年の日本映画史に直接結びついているはずだ。これまでの20年、そしてこれからの20年に向けて、ヨコハマ映画祭は日本映画総体への強力で、しかも有意義な応援団たりえると僕は確信する。

（映画評論家）



昨年の表彰式から

世紀末への処方箋

塩田時敏

酒鬼薔薇の衝撃が世界を恐怖させた'97年末に公開された、黒沢清監督の傑作「CURE キュア」。こういうベストテン行事では忘れ去られがちな時期の公開ながら、記憶が薄れるどころか、より鮮明な印象で観客の脳裏にフラッシュバックし、堂々のベスト1作品賞だ。心底怖い恐怖が張りついた。まさに世紀末を代表する作品となったのである。

実際、「CURE キュア」の恐怖は、日を追うごとにリアルに感じられるようになっていく。「リング」などとは違って、この恐怖に終りはない。それは、ひたひたと我々の現実に現在に、一歩また一歩とリンクしつづけているのである。

“恐怖”は黒沢清が早くから追い求めているテーマの一つだが、「CURE キュア」という題材は黒沢的“見せない”恐怖演出と素材が見事にハマった一本だ。ここで扱われる恐怖は、精神という目に見えないもの、サイコである。これ見よがしに、ハデな見せ物をくりひろげるのではなく、“見せない”という黒沢的恐怖演出でなくては活かない恐怖なのだ。実に即物的な死の描写の、確信犯的演出。刑事ものというジャンルを身にまとい、ここに類いまれなる恐怖映画がアートと一つになった。それは「羊たちの沈黙」も、「セブ

ン」をも越える恐怖映画の新地平。日本映画史上、最も怖い映画と言っているだろう。

これが、たまさかのまぐれでなく、本当にベスト1に値するというのは、'98年の黒沢清の作品「蛇の道」「蜘蛛の瞳」を見てもわかる。恐怖映画でこそないものの、この奇妙な復讐劇の連作には、一貫して、不条理な現代の恐怖といったものが、べったりと張りついているのだ。ちなみに、ここでの大杉漣の異様さも凄まじい。助演男優賞総ナメは、けだし当然である。

「CURE キュア」における俳優の演出も見事だ。心の中の闇を体現する萩原聖人。その萩原の Puls に同調して、ミイラとりがミイラになる如く、刑事の役所広司や心理学者のうじきつよし、除々にかつ急速に引き込まれ、狂ってゆく様が実に怖い。この争い難い恐怖の演出はほぼ完璧だ。

個人的には、クリーニング店のシークエンスが最も気に入っている。見るからに精神不安定な中年サラリーマンの客。再度くり返されるシークエンスで役所にダブって見える上手さ、怖さ。はたして、いつキレるのか。そう、世紀末、我々はいつキレてもおかしくないのだ。「CURE キュア」はそんな世紀末への処方箋なのである。

(映画評論家)

あの恐怖は始まりにすぎない !!

イソガイマサト

黒沢清監督はとらえどころのない人だ。彼がフライシャーに憧れ、ゴダールの洗礼を受け、エドワード・ヤンと同じ匂いを嗅ぎとりながらも“日本映画を撮るしかない”といったスタンスでいることは誰もが知っている。ヘタな評論家より、映画への造詣が深いことも有名。だがそれ以外にも、控えめな物腰と優しい眼差し、丁寧でやや学者的な独特な喋り方といった表面的なイメージとも

重ならない、何か計り知れないモノをまだその内面に潜ませている気がしてならないのだ。

何しろ『CURE キュア』みたいな怖〜い映画を涼しい顔でまんまと創っちゃう人。あの設定は、どこから生まれたのだろうか？ しかも映像にしばらく“人間の心の闇”なるものが生み出す恐怖を、黒沢監督はサイコ・スリラーなどの安易な設定に逃げることなく、きちんと映像で見せ、そ

れがこの上なく怖いからビックリ!「恐怖の中に生きるとき、皮肉にも人間は最も濃密な生を送る」とうそぶくに至っては、この人こそ映画の中の間宮(萩原聖人)なのでは? と思ったほどだ(笑)。

『CURE キュア』では全編をイヤな空気が埋め尽くす。それは黒沢監督ならではの退いた画が作り出す部屋の妙な空間、寒々とした廃屋、干からびた猿のミイラといった説明もなく挿入される映像や、洗濯機のブーンという音などから生まれる不吉な気配。幾つものイヤなものを並べ、“恐怖”そのものを立ち上がらせるその手法は、黒沢監督がここ数年の量産態勢の中で試して来たことの応用だろうけど、ここではその集大成と思えるほどに揺るぎがない。それだけに怖い。さらに「不安はあんたの方にある」といった思いがけない、だが核心をついた言葉で思いきりゾーッと

させ、ラストでは主人公の“恐怖”を映画のタイトル“救済”へと昇華させることで、観る者には逃げ場のない恐怖を味わわせる鮮やかさだ。

と、少し分かった気になって最新作『ニンゲン合格』に臨んだら、いきなりガツンとやられた。『勝手にしやがれ!!』シリーズの意外なコメディ・テイストにもビックリしたけど、今回はアレとも、『CURE キュア』『蛇の道』などのテイストとも違う新たな黒沢ワールドに大いに戸惑ったのだ。だが同時に黒沢監督の内面には、そんな驚くべき発想がまだまだ秘められていることも確信。99年もあの幻の企画『カリスマ』を含む2作の製作がすでに決まっているという。巧妙に変貌を遂げる黒沢監督の快進撃はまだ始まったばかりなのだ。

(フリー・ライター)

監督賞 磯村 一路

祝 磯村監督・受賞

野村 正昭

菌痒いなあ、本当に菌痒いってありゃしないと、随分長いこと僕は思っていた。実力のある映画監督が世間に認められていないという事実が菌痒さの原因であり、磯村一路監督こそ、その映画監督だった。ピンク映画時代の「狂った情事・おしゃぶり」(81年)、ロマンポルノ時代の「愛欲の日々・エクスタシー」(84年)、そしてオリジナル・ビデオ「特攻レディース・夜露死苦!」(94年)は、いずれも迷う方なき傑作であるが、プロの映画評論家でさえ見ている人は少ないだろう。

一般映画「ギャッピー／ぼくらはこの夏ネクタイをする!」(90年)や「あさってDANCE」(91年)は佳作であるが、前述した傑作群に比べれば、物足りなさは、どうしても否めず、全国公開された「Jリーグを100倍楽しく見る方法!!」(95年)に至っては、啞然とするしかなかったのだから、つくづく磯村さんはインタビュアー泣かせの人でもある。ユニット5結成時だから、もう10数年前になるか、初めて取材でお会いした以来、数度インタビューさせてもらったが、寡黙の人の印象が

強く、記事にはなりにくかった。僕だけにそうなのかと思ったら、そうでもないらしい。しかしそれで敬遠したくなるわけではなく、逆に親しみを覚えさせてしまうあたりが、凡人とは一線を画する磯村さんの才能だと思う。それだけに菌痒いかったのだ。現代の風俗を小器用にスケッチして、小手先の技巧だけで観客に媚びたりする映画監督がもてはやされるのを見るにつけ、磯村さんの控え目だが正攻法の演出が、なぜ結実せず、世間に認められないのかと、この10年間、イライラさせられっぱなしだった。

そして、ボートに賭ける女子高生たちの青春群像を描いた傑作「がんばっていきまっしょい」が、ついに世に出る時を迎えたのだ。ここには磯村さんの硬質な抒情が実に丁寧に生かされて、しかもそれが一回り大きく、ゆったりとした形で表されている。登場人物を見つめる視線は繊細だが、決して甘やかしたりはしていない。だからこそ「がんばっていきまっしょい」のかけ声が、観客ひとりひとりの心に沁み入るように届き、ラストで感

情移入させられてしまう。

「ロッキー」に代表されるスポーツ映画が僕は
大の苦手だが、「がんばっていきまっしょい」は
ヒロインたちが失われかけた自分のプライドを取
り戻すために、必死でボートを漕ぐ、その姿の潔
さに感動させられた。彼女達の奮闘を見ているう
ちに、積年の歯痒さが雪が溶けるように消えてい

くのを感じて、言いようのない解放感を味わった。
「がんばっていきまっしょい」が磯村監督の代表
作の一本に挙げられることで、過去の傑作が正当
に評価され、未来の磯村作品が、より豊饒な形で
実現することを望む。

(映画評論家)

新人監督賞 庵野秀明

庵野秀明監督のしたたかな意思と英断

坪内 美智代

おこがましいこととはわかっている。

かの社会現象にもなった「新世紀エヴァンゲリ
オン」を観ずして庵野監督のことを語れようかと
いうものだが、監督自身もおっしゃっていたよう
に、テレビ版の「エヴァ」さえ観ていなかった者
には、映画版「エヴァ」が高々と掲げていた“一
見お断り”の札が訝々と見えてしまい、あの領域
に踏み込むことができなかつたのである。

でも、蚊帳の外にいながらもまったく興味がな
かつたわけじゃなく、理詰めにすべてがわかって
しまう（または説明されてしまう）ことに嫌気が
さしていた者にとって、数珠つなぎになった謎が、
突出した“わからなさ”になり、その“わからな
さ”はわからないまま作品自体が抱え込んで結ば
れているというその在り様に、ある種の心意気の
ようなものを感じていた。

そんな一方的な想像が膨らみ、ほのかな期待と
なってようやく観ることができたのが、監督初の
実写映画となった「ラブ&ポップ」である。村上
龍原作の「ラブ&ポップ」は、援助交際を唯一女
子高生サイドから描いた小説として話題になっ
ていたので（確か本屋の棚のところにそんな宣伝
文句のようなものが書かれていたような記憶があ
る）、映画版「ラブ&ポップ」は、内容はほぼ原
作どおりだが、カメラマン、監督は勿論、役者も
カメラを回したという独特のビジュアル感覚が、
新鮮な生々しさといびつさをもって視覚を刺激し、
ノイズが毒を醸し、初めての強烈な物欲とその鮮
度期限をシステムチックに表す字幕使いの上手さ
など、単に原作を立体化したものに止まらず、新

たな血肉をつけた異なる感触をもった作品として
立ち上がっている。普通このような女子高生を描
いた映画は、作り手側の思い入れや憧憬をとも
なったエモーショナルな作為が植え付けられてい
るものだが、彼女たちに共感できない、理解不能
なものとして強引な解釈を施していないところに、
監督のしたたかな意思と英断をみた思いがする。
監督の意識としては、むしろ彼女たちではなく、
彼女たちと援交する男性たちを面白がっているよ
うに思えるのだが（手塚とおる氏、吹越満氏、平
田満氏等々、なんて濃ゆくてドキドキするキャス
ティングなんでしょう。）、多彩な援交相手を周到
に配することによって、ほんの一瞬垣間見せる彼
女たちの表情の揺れ、なにも見つめていない瞳、
邪なイノセンスが鮮やかに映し出されている。こ
れが監督の言う“閉塞の中の希望（＝夢）”なの
かもしれない。以前雑誌のインタビューで語っ
てらした「作り手が夢をみてしまったらおしまい」
という言葉の思い出す。それはクールな言葉のな
かに蠢く熱情、自らの映像の中に自分以外の何か
をみてみたいという欲望に他ならない。庵野監督
が探す夢はどこにあるのか。前記のインタビュー
によれば、監督は演劇にも興味をもたれていると
か。今回の絶妙なキャスティングに十分刺激され
てしまったわたしは、新たなフィールドでの監督
の活躍を楽しみにしている。

(事務員)

あなたたちの敵は

“東京ディズニーランド”なのだ

進藤良彦

配収30億円を越える“超”がつくほどのビッグヒットとなった「踊る大捜査線」の成功の要因は何だろうか。すぐさまいくつかの項目は頭に浮かぶが、やはり何と言っても真っ先に称えたいのは、君塚良一のシナリオである。

と、言い切ったうえで、「踊る大捜査線」という良質の娯楽ソフトを支えているのが、全スタッフ・キャストの労力の結集であることは特筆しておきたい。おそらく、どの要素が欠けたとしても「踊る大捜査線」は成立しないだろう。その意味で、“審査員特別賞”という形で作り手たち全員を対象に表彰するのは極めて正しいが、そういう枠で“特別扱い”しなければならないことは、同時に極めて間違っているとも言わざるを得ない。

ここには、日本映画界において綿々と続いてきた、テレビ・ドラマの作り手たち、およびテレビ局製作映画に対する“差別と偏見”が、別の角度から息づいている。

何をもってシナリオの優劣を計るかという基準は人それぞれであって、「踊る大捜査線」のシナリオを評価した人たちの中でも、それはさまざまであると思う。先の言と矛盾するようではあるが、「踊る大捜査線」のエンターテインメント性を支える全てのスタッフワーク、俳優たちの仕事を導いたのは、やはり君塚シナリオの功績だ。

君塚良一のシナリオは、決してテーマを声高に叫ばない。「組織の中で信念を貫くことの困難さ」を描いてはいるが、現代的な犯罪のかたちを取り上げながらも、決して社会派にはならない。奇をてらったキャラクター作りもドラマ運びもせず、“刑事もの”ではなく“サラリーマンもの”としての等身大の日常を、観客にとっての非日常的空間に展開していく。

映画が娯楽であることを長い間忘れてきたような日本映画界にあって、君塚良一（に代表される「踊る」の作り手たちの全て）は軽々とその娯楽の高みに到達しているのだ。

豊作だった昨年10-12月のテレビ・ドラマの中で、駅売りの夕刊紙編集部を舞台に新聞記者たちの奮戦ぶりを描いて健闘した『タブロイド』というドラマがある。その中に『夕刊トップ』の編集長・佐藤浩市の「俺たちの敵は缶コーヒーだ」という名ゼリフがあった。自分たちのライバルは競合夕刊他紙ではなく、駅の売店で同じ120円で売られている缶コーヒーなのだ、と。

萩本欽一のもとでバラエティ番組の構成台本を書いていたころの君塚良一は、気まぐれにチャンネルを変える移り気な視聴者を相手に番組を作ることの難しさ、ナイター中継を敵に回して数字を争うことの熾烈さを学んできた。

日本映画界の敵は — 、少なくとも邦画メジャー三社の敵は、隣の映画館ではない。あまたある娯楽の中から映画館に足を運ばせることの困難さは、かつて映画が娯楽の王道であった時代からは想像もつかないほどである。そのことに気づいているメジャー映画の作り手たちは果してどれくらいいるだろうか。

あなたたちの敵は、“東京ディズニーランド”なのだ。テレビ・ドラマの作り手たちは、とっくにそのことに気づいている。そして、「踊る大捜査線」につめかけた観客たちも、また。

(フリーライター)



画面のたたずまいが魅力

寺脇 研

このあいだ告白したばかりだ。

わたしには撮影技術の本質を論じる力量などない、と。

久しぶりに出た「映画芸術」、好著「姫田眞久のパン棒人生」(タゲレオ出版)の書評においてである。撮影と照明と演出との基本的関係さえ理解していないくせにカメラの仕事ぶりに対してきいたふうな文章を書く評論家スノビズムを、厳しく自戒させていただいた。

「……プロの腕前をみせる長田勇市の撮影がすばらしく、特筆ものだ」とは、その折りに、わたしの過去の無神経な表現の一例として引用したもの、撮影の腕前の善し悪しなんてわかりもしないくせに、よくまあ恥ずかしげもなく能書きを垂れたものだ。知ったかぶりはみっともない。

じゃあ、『がんばっていきまっしょい』の長田勇市カメラに、どう賛辞を呈すればよいのだろう。簡単だ。素直に賛嘆すればいいのである。画面のたたずまいが魅力的だ、と。もちろん、監督、照明、美術等々のセクションとの共同作業の結果生まれたものではあるが、その結果できあがった画面総体の持つ力は厳然と存在する。ここでは、わたしにはわからない撮影技術を無闇に賞賛するの

でなく、できあがった画面そのものを称えたい。

開巻、今は廃屋となったボート部艇庫の建物をとらえるところから、画面は観る者を惹きつける。古ぼけた暗い空気の向こうから二十余年前の青春が甦ってくるこの導入部のたたずまいに、まず気持そられる。一階から二階と、取り壊しのための検分に訪れた役人たちがゆっくりと移動するうちに、ほどよい速度でわれわれは時間を超えていくことができる。

で、ボートに挑む少女たちの生硬な青春物語。昔の地方都市のたたずまいを、画面は随所でくっきりと切り取ってみせる。路面電車、町のうどん屋……なつかしい風景が示され、クリーニング屋を営むヒロインの無口な父親がアイロンに向かう後ろ姿の一コマには、昔のオトナの気配が色濃く漂う。

こうした落ち着きのある画面を並べた挙げ句のクライマックスに、躍動するボート競技の映像がダイナミックに展開されれば、昂揚は鮮やかに強調される。甘すぎず厳しすぎず、青春の哀歡を等身大に描こうとするこの映画にぴったり合ったすばらしい画面を、たっぷり堪能させてもらった。

(映画評論家)

二枚目俳優の“くずし方”

秋本鉄次

中井貴一さんは二枚目俳優である。たとえ本人にそんな意識はなかったとしても、世間一般から見れば明らかに二枚目である。父親は往年の松竹の二枚目スター佐田啓二さんだもの。まさに“良血”。

その血のなせる技で「連合艦隊」で映画デビューして以来、ずっと二枚目畑を歩いてきた。でも、ある時期、そういう二枚目性をくずしたくなることもある、と某二枚目俳優に取材した時に聞いたことがある。人生で一度も二枚目と呼ばれ

たことも、自意識したこともない僕にとってはその心境は永遠に分からないが、“現状打破”の精神ということでもまあ納得した。

で、浅田次郎原作、森崎東監督作の「ラブ・レター」の中井貴一さんを見て少なからず驚かされた。まさにその二枚目性を打破していたからだ。新宿の歓楽街で裏ビデオ屋やら使い走りやらチンケな仕事をしているチンピラ役。不法滞在でパクられるのを防ぐためだけのペーパー夫婦として、彼と偽装結婚した出稼ぎ中国人美女とのプラト

ニック・ラブを描いたこの作品。

チンピラといってももう中年に近い年の、いかにも不器用で、ワルにもカタギにもなれない中途半端で優柔不断な男。戸籍をちょっと汚すだけで報酬は80万円とはワリのいい稼ぎに見えるが、お前にゃプライドはないのか、といたくなる。血も涙も残っているとはいえ、見ていてじれったくなるほど、正直言って少々トロい。そんなツブシのきかない男を“二枚目”中井貴一がさりげなく熱演してくれたのだから、すごく新鮮に映った。なるほど彼の善人顔はこういう使い道（失礼な表現ですみません）があったんだ、と目からウロコが落ちた。

そんな中井貴一さんが演じるからこそ、あっけなく客死するヒロインがつづったたどたどしいラブ・レターに涙し、彼女を死に追い込んだ状況とその一端を担っていて、なおかつ無力な己に対するやり場のない怒りが表現されていた。これがい

わゆるご存じの演技派性格俳優さんが演じたら、鮮度は逆に薄まっただろう。中井貴一さんは意識的か無意識的か分からないけど、二枚目の“くずし方”をすでに体得しているのだろう。「お引越し」でも「四十七人の刺客」でもすでにくずしていた。もちろん、くずしっぱなしではない。「残侠」では正統派二枚目の侠客をちゃんと演じている。二枚目をくずしたり、元に戻したり、楽しんでいる風もある。余裕だろうか。

今年、中井貴一さんは確か38歳。不慮の自動車事故で他界した父、佐田啓二さんのくしくも享年でもある。その年齢を乗り越えて、どのような演技の幅を見せるのか、「ラブ・レター」でちょっと“予告編”を見せてもらったような気がする。また“浅田次郎ワールド”の映画化あたりで“くずした”中井貴一さんの登場をひそかな楽しみにしています。

(映画評論家)

主演男優賞 真木 蔵 人

真木蔵人と石井久はよく似ている。

斎藤 芳子

友情に厚く、とっても寂しがり屋で、すごく正直で純粹で、ちょっとばかり不器用で、顔はハードボイルドだが中身はピースな若者。

「愚か者 傷だらけの天使」で真木蔵人はまるで自分自身みたいな青年・石井久を全身全霊でハッピーに演じている。

マッキーに初めて会ったのは、一昨年のはじめのことでした。『キネマ旬報』で前作「傷だらけの天使」のインタビューをすることになったのです。すでに試写を3回も観るほどこの作品にはまっていた私は話をもらい「超ラッキー！」とばかり、その場ですぐOKの返事をしてしまったのでした。でもしばらくして冷静になってみると「ひょっとしてヤバイかも」と思った。その時点の私にとって俳優・真木蔵人のイメージは“何か怖い”の一言であったから。私の頭にはある妄想が浮かんだ。以下はその妄想部分〔年齢の割に成熟した男・真木蔵人→クール→無妄想→無口→会話が成立しない→長い沈黙→取り乱す気の小さい

私→「あんたとは話にならないよ」と突然席を立つ真木蔵人→呆然と立ち尽くす私〕。

しかし人間の先入観ほど当てにならないものはありませんな。“先入観を捨てよ、まず会ってみろ！”と私は声を大にして叫びたい（自分自身に）。そして私はこの“出会い”に運命を感じたのでした（一方的だけど）。

人と人との“出会い”って不思議です。ある日、性別も年齢も出身も職業も経験も価値観も、とにかく何から何まで違う人からとっておきの感動を与えてもらえるんだから。マッキーは本当にいいヤツでした。現場でのエピソードや監督や共演者やスタッフの話を通して私が感じたのは、自分を取り巻く環境や周りの人たちを心から愛し、その中で精一杯頑張っている彼の姿でした。

私はラッキーにもこの「愚か者 傷だらけの天使」の撮影現場に何度も足を運ぶことができました。その中で一番印象に残ったのは、阪本監督と俳優・真木蔵人との絶対的な信頼関係でした。

いつもマッキーは「阪本監督との“出会い”は僕の俳優人生の財産」と言っているけれど、また阪本監督にとっても俳優・真木蔵人との出会いは本当に大きかったのだなと改めて実感したのでした。

「愚か者 傷だらけの天使」は前作でマッキーが弟分・久を演じたからこそ誕生した作品です。もし他の俳優さんが久を演じていたら、恐らくこ

の“外伝”は誕生しなかったでしょうね。

一生懸命なのに笑える、ひたむきなのに上手くいかない、とんでもない経験をしたくせにちょっとも成長しないヤツ。そんな愛すべき“愚か者”久くんに乾杯！ なのである。

(映画ライター)

主演女優賞 原田 美枝子

存在の見事さ

田中 千世子

原田美枝子の演じる豊子にほれほれする。夜叉の激しさ、そして美しさだ。

なぜ、実の娘を虐待するのか。多分、いくつか理由はある。同時に理由を越えてさらに何かがある。その何かは虐待したいという純粋な欲望ではないかと思う。これがすごい。こういう欲望を持ち続けて、それに負けないのだからなおのことすごい。負けないのは、娘を虐待するのは何故？と豊子は決して自問しないからだ。そういうヒロインを見事演じて、演じぬいた原田美枝子。彼女は自由で強靱な精神の持ち主だと思う。

原田が「恋は緑の風の中」でデビューした頃、優秀映画鑑賞会でこの映画の試写があり、上映前の舞台挨拶に来た原田に会ったことがある。彼女を紹介したのか、それとも花束を贈呈したか、そのどちらかだったと思う。その後会ったのもやはり優秀映画鑑賞会で、「大地の子守歌」の時だった。増村保造監督もいらして、開会前に控室で監督と原田が談笑していた。急に女ぼくなった原田は、女優らしい華やかさと、以前と同じ少女の精悍さを合わせ持っていた。増村監督はそんな原田をかわいく面白く思っていたのではないだろうか。

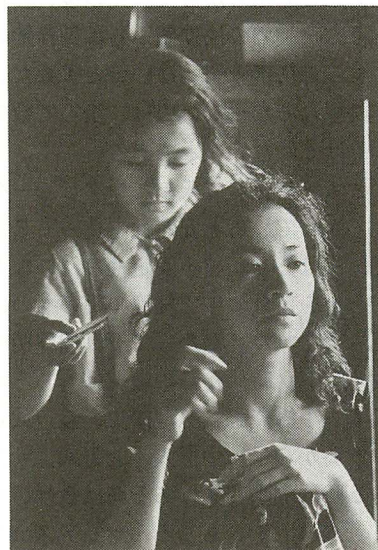
精悍さを持った少女の原田が豊子の娘、照恵の少女時代を演じたら映画はもっともっと面白くなっていたのではないかと、とても欲張りなことを考えてしまう。少女時代の原田の演技をコンピューターで分析して、そこからキャラクターをつくりあげて、特撮をいくつも組み合わせれば多分、そういうことも可能なのだろう。

もっとも、欲張らずとも実際の映画の二役も悪

くない。

大人になった照恵は、豊子をなんとか理解したいと思う。理解することで自分の少女時代から今日までを癒したいのだ。そういう心を原田は痛切に演じる。照恵が豊子の美容院で髪を切ってもらうシーンがいい。理解したい。その心にほんの少しの悔恨、あるいは動揺をもたらせたら、と照恵は思う。しかし、豊子は多分、全然別のことを考えている。照恵だなという勘は働いたろう。次に彼女が考えるのは、何か文句でも言いに来たのだろうか。ええい、しらばっくれちまえ。たぶんこの二つだ。それ以上は考えない。何という存在の見事さだろう。善悪の価値基準を越えた存在というものは、ほれほれするほど真実で美しい。

(映画評論家)



無限の顔を持つ俳優は、今日もどこかで “新たな顔探し”の旅をする…。

中村 勝 則

ちょうど、今から9年前のことである。まだ映画業界に首を突っ込んだばかりの私は、知人の紹介で『すっぱんぼん』という映画の制作助手についた。制作助手といっても、そこは少数スタッフによる16ミリの低予算映画で、丸2週間群馬県の片田舎での合宿生活。助監督兼任であることはもちろん、時に録音や照明の助手もやらざるを得ないという、まさに何でもあり(?)の現場で、そのすべてが未経験で無知だった私にとって、そこはまさに地獄そのものだった。

しかし、私はそこで“大杉漣”という役者に初めて会うことが出来た。当時の大杉氏は、ちょうどピンク映画から離れて舞台中心に活動していたところで、この『すっぱんぼん』が本格的な映画復帰作でもあったように思う。それだけにピンク時代から氏の大ファンだった私は胸いっぱいになり、現場で大杉漣の芝居を目の前にしたときは、それまでの地獄など一気に吹き飛んだ。今にしてみればこの現場に参加できて本当によかったと思う。

以来、氏とは親しくさせていただき、映画ライターとして取材も何度かさせてもらったが、そのたびに新たな刺激を追い求める気迫が伝わってくるのもファンとして嬉しかった。その後、90年代に入ってからの映画での快進撃ぶりは御存知の通りで、作品もここに書き切れないほど多数だ。しかしここで誤解してならないのは、決して数で勝負しているわけではないことである。

91年に『キネマ旬報』で氏のインタビューをした際「続けて演じていると安定性を持ってしまうものだけど、僕はどこかで不安定性みたいなものをもって、それを自分の中で純度の高いものにした」と語ってくれた。だからこそ高橋伴明やユニット5系らピンク時代からの戦友はもちろん、一方で黒沢清、小松隆志、三池崇史、渡辺武ら90年代以降の俊英から、竹中直人、北野武、サブとヤクザ、ある時は刑事、またある時は教師、サラリーマン、老人etc…、もちろんシリアスorコミ

カル、善or悪も含めて幅広い役柄を難なく演じられてるのだろう。その化けかたに我々観客はいつも驚かされていることは言うまでもなく、またそれが氏自身の刺激になっていることも間違いないはず。

特に『ソナチネ』(93)以降常連となった北野組では、役者として最大の武器になるはずの芝居的要素を排除するところから入っただけに、氏にとっても大きな分岐点となったようだ。某雑誌のインタビュー記事で「僕は未だに“正しい演技”って何だか分からないんですよ」と語っていたのが印象深い。まさに大杉漣ならではの名言だろう。『HANA-BI』の堀部にせよ、『犬、走る DOG RACE』の秀吉にせよ、はたまた『がんばっていきまっしょい』の校長先生にせよ、そういった模索があったからこそ生まれてきた“新たな顔”なのである。

大杉漣は今日もどこかで“新たな顔探し”の旅をし、私はその旅先から随時届く“映画”という便りをいつも楽しみに待っている。そして何よりヨコハマで氏と久びさに再開できることが今一番の楽しみである。

(シネマライター)



多彩なキャリアを含めた一つの到達点

林田義行

5年前の秋、大蔵映画の新作試写に向いた僕は、そこで一人の女性がプロデューサーと話をしているのを目にした。やがて映画が始まり、しばらくすると、スクリーンの中に先程の女性が登場。「新しい女優さんだったのか…」と思いながら彼女の出演場面を見つめた。その作品では脇役の扱いで出番も多くはなかったが、スクリーンの中で芝居をし、やがてセックスシーンを演じる彼女を見終えた僕は「決して若くはないけど、演技力はあるなぁ」という印象と共に、その存在が大きく心に焼きついた。それが女優・吉行由実との出会いだった。

「決して若くない」というのは本当に失礼な言い方だが、その大半がAVから流れてくるピンク映画の女優というのはほとんどが二十歳前後だから、二十代後半でデビューした吉行さんが奇特な存在だったのは間違いない。しかも、吉行さんは単にお金のために裸業界の道を選んだわけではなく、純粋に芝居をやりたいという理由でピンク映画界に足を踏み入れたのだ。

AVの影響でセックスシーンがハードになってきたとはいえ、ピンク映画がドラマ主体でつくられているのは変わらない。AV流れの素人同然の子が出れば、いくら可愛くても演技の拙さで見ているこちらはシラけてしまう。そんな時代だからこそ、演技力の確かな吉行さんは瞬間に業界内では引っ張りだことなり、観客の僕も吉行さんの名前をクレジットに見付けると安心して作品に見入ることが出来たのだった。

そして吉行さんは、女優のみならず監督業にまで進出した。他愛無いストーリーと派手なセックスシーンだけの空虚なピンク映画も少なくない中、吉行作品は単なるドラマや映像の充実、ディテールのこだわり、あるいは女性らしさがうまく表現されている、などということだけでなく、観客を大きく包容し幸福感を与えてくれる。先日某雑誌の取材で吉行さんに改めてお話を伺った際に印象に残った言葉がある。「今まで生きてきて映画というものに凄く救われてきたんです。だから、私

の映画も最後には救いを与えたいんです」。果たしてピンク映画の主要観客層である、生きる覇気も感じられない高齢の人達が救われているのかわからないが、少なくとも僕自身が一時の安らぎを与えてもらっているのは確かだ。

おっと、これは助演女優賞受賞のコメントだった。監督としても高い評価を集めた吉行さんの次なるステップが、今回の受賞の対象となった「D坂の殺人事件」と「大怪獣東京に現る」というメジャー作品への大役での出演。正直言わせてもらえば、百本以上のピンクの諸作品を見てきた僕としては、「D坂の殺人事件」のミステリアスなムードも「大怪獣東京に現る」のブッ飛んだキャラクターも、大きな驚きはなかった。どちらのキャラクターも、「あぁ、あの作品の吉行さんを思い出すなぁ」という感じで、むしろ吉行さんならこれ位の演技は当たり前という印象だった。

とはいえ、低予算のピンク映画とは違うメジャー作品ならではの演出と吉行さんの演技の融合が今までにない密度の濃さを感じさせてくれたのは間違いない。今回の受賞は、まだ未知なる新進女優への期待を込めてという感が強いが、僕個人としては今までのピンク映画でのキャリアを含めた一つの到達点、そして大きなターニングポイントとしての評価、と捉えたい。

拙者の発行するピンク映画のミニコミ誌「P・G」にて毎年選出される「ピンク大賞」において、吉行さんは93年度の新人女優賞に始まり、女優賞、新人監督賞、監督賞と、97年度までの5年連続計6つの賞を受賞している。時には徹夜の撮影明けにも関わらず、毎年欠かさず会場の亀有名画座まで来場して喜びの表情を見せてくれた。

今までは賞を贈る立場でしたが、今回のヨコハマ映画祭の表彰式では全くの観客の立場で、その受賞を見守ってたいと思います。吉行さん、本当におめでとうございます。

(ライター／ミニコミ誌「P・G」発行人)

自然体の不機嫌な蕾

ますだけいこ

とりまく時代や町・学校・家庭などのシチュエーションに違いはあるけれど、かつて自分も通り過ぎて来た思春期の心の情景。『がんばっていきまっしょい』という、すがすがしいタイトルの愛すべき作品で、田中麗奈はその心の揺れ動くさまを、いきいきと表現してみせてくれた。

彼女が演じたのは、松山の高校1年生・篠村悦子。家出の真似ごとをしても家族は無関心で、秀才の姉には劣等感を抱き、学校に行けばテストは出来ず教師には怒鳴られ・・・何かしら面白くない毎日を送っていたごく平均的な女の子である。しかし、決してうつむき加減というのではない。ボート部に憧れ、女子の部がなければ「作ったらええんじゃ！」と一念発起し、しぶる同級生を口説きおとして、創設にこぎつける。高校生活という新しい日常に自ら燃えるものを見出そうとする情熱とひたむきさが、田中麗奈の真っすぐな眼差しを介して、見る者の心に熱く伝わり、物語の展開を期待させる。

派手ではないが印象的な凛々しい顔立ちと、姿勢がよくスレンダーな肢体。ともに清潔感が漂い、スクリーンに登場すると、そのシーンの空気が澄む。痛みきった茶髪のコギャルを見慣れた昨今に

は、逆に新鮮で貴重な素材だ。けれど、単なるよい子ちゃんタイプという感じではなく、一本筋の通った意志の強そうなところも未知の可能性を感じさせ魅力。彼女のそんなイメージが、悦子という役柄と見事に合致した。

また、彼女の演技が自然体なのも素晴らしい。大人と子供の間を行き来しているような不確かな年代の、とまどいや苛立ち、悔しきや切なさなどを、気負いを感じさせずさりりと演じていて、見る側の心に素直に浸透してくる。私など、悦子の倍の年齢なのに、いつの間にか悦子と同化して泣いたり笑ったり、ときめいたり、すっかり「青春」してしまったのではないか。こんな嬉しい体験が出来たのも田中麗奈のおかげである。

悦子は、ボートを通してひとつの成長を遂げるが、この作品でデビューを飾った田中麗奈もまた、自分の中でそれを感じているのだろう。

作品の中では、ふてくされた表情が多い、不機嫌な果実ならぬ不機嫌な蕾みは、波光きらめく中で少しふくらんだ。既にブラウン管ではおなじみの彼女だが、映画ファンとしてはスクリーン上で、どんなふうにか開くか期待したい。

(イラストライター)

ベストテン第2位 「がんばっていきまっしょい」と田中麗奈

寺本直未

「がんばっていきまっしょい」は、98年のマイ・ベストワン映画だ。ボート部の少女たちが地区予選に挑む、というこの青春映画は、フィクションでありながら、どこかノンフィクションのように、リアルに少女たちを写し出すみずみずしさに、心底シビれた。実際彼女たちは撮影の10日前から走り込み、ボート漕ぎ、体操などのトレーニングを始め、道後温泉で合宿しながらの撮影だったそうだから、まさに体を張ってこの作品と向き合ったのだと思う。

どこかボーイッシュ、そして負けじ魂を感じさせるまっすぐな瞳。田中麗奈さんは、さすが200人を越すオーディションの中から選ばれたと納得させるほどハマリ役だった。それまでは九州でモデル活動をしていたという田中さんは、オーディションの時から、「この映画は私の映画だ！自分は女優になるんだ」というひらめきがあったという。まさに運命的なこの作品との出会い！これは本当に幸せな巡り合わせだったと思う。

きわめて現代的な風情なのに、どこか彼女は文

芸モノにもフィットするような、いずまいの正しさを感じさせてくれる。彼女を抜擢したそのセンス、それは「がんばっていきまっしょい」という傑作を生んだ核、とも思えるのだ。

「がんばっていきまっしょい」が洗練された青春映画だなぁ、とつくづく思うのは、ほんのささいな気遣いだ。ボートハウスのオリーブグリーン、ちょっと気になる男の子に憎まれ口をたたいてしまうエピソードなど。田中さんは、おそらく無我夢中で特訓を受けながら、そんな磯村監督の青春を見据える感覚を、無言のうちに読み取ったに違いない。

美少女が制服を着たアイドル映画は、あまりに監督の偏った願望というか、女子高生を絵空事に

しか描かず、女性から見ると「カンベン…」という思いに捕らわれることがよくある。だが、「がんばっていきまっしょい」は、食い気盛りの女の子を描き、ブルマー姿の彼女たちを、実にスポーティに見せてくれるから、納得がいく、のだ。磯村監督は不思議なぐらい、男の視点から少女を描いていない。少年のようでもあり、時代設定も22年前、という限定したものを感じさせない、このニュートラルな視点の気持ちよさ！

こんな素敵な作品でデビューを飾った田中さんは、とても強い運と鋭い感性を持った女優さんだと思う。清らかな感動をありがとう。

(映画ライター)

最優秀新人賞 麻生久美子

国際女優としてスタートしたあなたへ

小張アキコ

自分ではこれこそが適職と信じていたにもかかわらず、他人に指摘されたものの方が、自分の天職だったというケースがままある。麻生久美子の場合がまさにそう。アイドル歌手になりたくて入った芸能界なのに、世界中のスターから「一度は出てみたい」とラブコールを受ける今村昌平の映画でデビューを飾るなんて、彼女は女優になるべく生まれてきたに違いない。

最初に麻生久美子を見たのは『カンゾー先生』の記者会見の日、1997年の夏が始まる頃だった。カンヌ映画祭から凱旋した今村昌平監督の隣でオーディションで選ばれたというシンデレラガールは、ライトブルーの服を着て緊張して座っていた。今村監督は「千葉出身の彼女に海の香りがしたのが起用理由」と話していたが、実は限りなくカナヅチに近かったなんて、大人たちを騙すとは大女優の素質大。

次に麻生久美子を見たのは、1998年5月の地中海に面したカンヌ映画祭での記者会見だった。壇上に立った新人女優は前に見た時と同じように緊張していたが、大きな役を演じきった自信とゆとりが備わって、1年前とは顔つきも表情も変わったような気がした。この時も彼女は何も言わな

かった。そして振りそでに着替えるからと会見途中で姿を消してしまった。

翌日の新聞には赤じゅうたんの上に真紅の着物を着た麻生久美子の写真が大きく出ていた。カンヌ映画祭での上映は、体当たりの演技が時として笑いを誘っていた。芸者のバイトを終えて帯を解くときの表情などに、現代っ子の明るさがかいま見えて、終戦間近という暗い時代の中で、麻生久美子という女優が本来持っている明るさが際立って光っていた。

麻生久美子が演じた「淫売」のソノ子は、ただお金ほしさに体を投げ出すんじゃなくて、自分なりの考えで行動している。時代に抵抗している、そんな娘だった。

カンヌの通りでバッタリ会ったプロデューサーの飯野久女史が「ともかく映画に出なさい、と言ってるの」と語っていたが、『カンゾー先生』の次に出演した『ニンゲン合格』（黒沢清）では、潑刺とした現代っ子の千鶴を演じていた。

『カンゾー先生』のラスト、鯨を追って海と一体化した彼女の姿に、今日、主演女優賞に輝いた原田美枝子10代の代表作『大地の子守歌』を思い出したりした。

覚えていますか？ カンヌ映画祭の記者会見の時。あなたの日本人形みたいな可愛らしさに、世界中から集まった強者記者たちが言葉を失って誰一人質問できなかったことを。カンヌ映画祭で2回もグランプリに輝いた世界中で何人もいない巨匠イマムラ。彼の映画でデビューしたあなたの、輝くばかりの眩しさに目を細めてただ佇むだけ…。

その熱い眼差しを忘れない女優でいてください。スクリーンのあなたの中に、選ばれた人にしか与えられない輝きを見いだした人のために、いつまでもあなたがスクリーンで羽ばたき続けてほしい、と願う人のために。

(映画評論家)

最優秀新人賞 三輪 明日美

あの素晴らしい出会いをもう一度

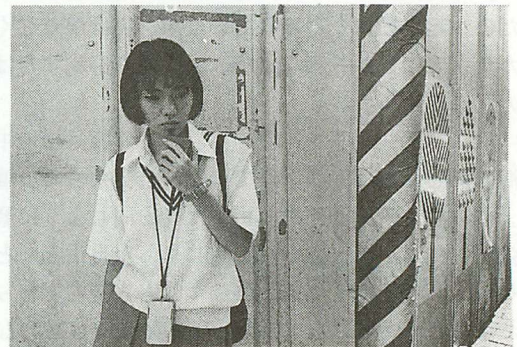
山下 慧

非礼を承知で言うが、『ラブ&ポップ』のエンド・クレジットに流れる主題歌「あの素晴らしい愛をもう一度」を、無条件に上手だと誉める人はいないだろう。とても一人前の主題歌とは思えない。だが誰もが言うに違いない、あの唄は良かった、と。この映画には、技術的な上手さ・器用さに固められず、感情も気力も曖昧なこの唄が必要だった。映画の主人公・裕美のナレーションも同様だ。お行儀の悪い遊びや惨憺たる出来事に遭遇しても大きな感情のこもらない、棒読みのモノローグが、この映画には必要だった。『ラブ&ポップ』は、上質な演技によって女子校生の日常を神話的な物語に高めるような映画ではないからだ。この映画はどこまでも描かれたものを“生(なま)”な表象として突きつけてくる。特にラストの主題歌は、ごちんまりとした総括に向かい安心して感情の反芻行動を委ねるような、そんな“感動の完結”への期待を打ち砕く破壊力を伴っていた。この破壊的な主題歌やモノローグ＝主演の大任を見事に果たし終えたのが、三輪明日美だ。

『ラブ&ポップ』における彼女の魅力は、この主題歌やモノローグのそれに等しい。一応断っておくと、あの主題歌が三輪明日美の精一杯でないことは、別録音のCDシングル版を聴けばわかる。あの唄が映画のための下手さであったように、まるで素のようなお芝居もまた映画のための必然だった。ある意味では状況に流されていくばかりの主人公の姿を、三輪明日美は、鼻詰まりにも聞こえる力の抜けた台詞回りで、たしかに映画撮影という状況に流されながら、流されるままに振る舞っている。彼女は裕美役と出会うことにまず大

きな才能を発揮した。こうした言い方は、あるいはキャスティングや演出の巧みさを言っているだけでも思われようが、しかし完全な作り物の中であからさまな素を演ずることの特権もまた讃えられるべきだろう。どんなに磨かれた演技でも出すことのできないきらめき、そしてそれとの出会いの瞬間を永遠に記憶することもまた、新人賞の義務なのだ。女優としての三輪明日美は未知数であるとしても、『ラブ&ポップ』の主人公は、間違いなくこんな“役者じゃない”女の子でなくてはならなかった。そうあることで“彼女”は確実に観客の内部に潜り込んでいくのだ。その必然の意味において、彼女はここに讃えられた。個人的な話、終盤で自分もまた裕美であるのだと心を震わせていた私は、私などを重ね合わせることさえ許容してしまう三輪明日美こそたいした“役者”なのだと思う。またこれから積み重ねられていく演技力に伴った、必然的な配役もいくつか転がっているとも確信する。そして願うのだ、あの素晴らしい出会いをもう一度、と。

(ライター)



98年を“踊る元年”と記憶しよう。

北川 れい子

わが「踊る大捜査線 THE MOVIE」の大フィーバーと、インド「ムトゥ 踊るマハラジャ」の大人気。

いずれもサービス精神が一杯の娯楽映画で、映画が踊ればファンも躍り、踊りと躍りの輪はどんどん広がって、みな大満足。

ま、インド映画の場合は、絢爛豪華な歌と踊りがたっぷり入ったお茶目な夢物語、プラス、もの珍しさやエキゾチズムも多分にあるのが人気の原因だと思うが、わが「踊る大捜査線 THE MOVIE」は、そういった情状酌量抜きに真正面から映画として勝負、ふだんは滅多に日本映画を見ない若い世代を熱狂させたのだった。

それにしてもテレビ版で注目を集めていたとはいえ、その面白さ、その勢い、そのパワーを、映画で更にスケール・アップして、ファンをしっかりと映画館へとつなげたプロデューサー以下の全スタッフ、そして全キャストの熱意と努力に、心から敬意を表さずにはいられない。

そもそもテレビ・シリーズを見たときの嬉しい驚き。日本でテレビ放送が始まって40数年過つが、この刑事ドラマ・シリーズは、まともに映画に立ち向かい、演出もストーリーも俳優たちもそして映像も、しっかりと映画として見せている。映画として勝負している。

テレビ・ドラマは往々にして、背中で見てもこ足りる、いや、家事その他、別のことをしながら見ても分かるのがテレビ・ドラマなのだろうが、「踊る大捜査線 THE MOVIE」の場合は、一瞬も目が離せなかった。これは凄いことである。

その凄さを更にふくらませたのが「踊る大捜査線 THE MOVIE」で、そう、ファンはこういう痛快な娯楽映画の登場を待っていた。

血のつながりはないけれど大家族を思わず湾岸署の面々。アメリカ映画を思わずカジュアルなテンポとスマートな演出。適度なハツリやおアソビにもサービス精神がゆき届き、しかも何クソという意地と、晴れ晴れとした達成感がある。映像ものびのびと大きい。

むろん、湾岸署のヤンチャ坊主・青島刑事の、時には正義派の兄貴のような、時には反抗的な弟のようなキャラクターが「踊る大捜査線 THE MOVIE」の痛快感のキーワードであるけれど、彼を囲む面々のそれぞれに個性的な役と演技も素晴らしい。それがハートの通ったアンサンブルを作り出し、けれども過剰に慣れ慣れしくはなく、その味付けの絶妙さ。

全てのスタッフ・キャストに感謝を!!

(映画評論家)

審査員特別賞 前田 陽

それは ないだろうよ、前田さん。

鈴村 たけし

前田陽一監督には、熱狂的なファンの人たちがいる。そういう前田フリークの足元にも及ばぬボクなんぞは、この稿を書くのも鳥辭がましい存在だろうが、ヨコハマ映画祭と前田さんのかかわりを中心に少々記させていただく。

前田陽一映画を観られることは幸福だった。デビューの時から観ていた。全26本、数多くの傑作

と少々の凡作を残して昨年5月、新作「新・唐獅子株式会社」の撮影中に監督は帰らぬ人となってしまった。11年ぶりのホンペンを撮りながらあの世に旅立ってしまうなんて格好良すぎるよ、前田さん。

毎日新聞のインタビューで、日本映画史上のベスト3は?と聞かれ、その1本に前田さんの「喜

劇・あゝ軍歌」を選んだことがあった。関内の前田さん行きつけのスナックで飲んだ時その話題になり「それはないだろうよ。」と苦笑されていた顔が目につく。「ボクが何をしようとするか大きなお世話ですよ。」と云い返したが、あとでづつにととても喜んでおられたと聞いた。そんなシャイなひとだった。

前田さんの映画は横浜を舞台にしたものが多かった。「喜劇・家族同盟」や「虹をわたって」など、観光都市ヨコハマの上っ面をなでただけのウソコ映画でなく、中村川沿いの下町の人情を斜に構えながらもあたたかい眼で見据えた映画を作られた。

実際のところ、前田さんには筆舌に尽くし難いほどお世話になった。ヨコハマ映画祭の初期に問題が起り行き詰まると、本牧の前田さんご用達の酒場によく相談に行った。「オレに出来ることなら何でもしてあげるよ。」の言葉にずいぶん甘えさせていただいた。

第5回の映画祭で特別大賞を受賞された時のこ

とだ。壇上に飲み仲間や店のオネエさんたちが大挙して花束を持ってこられた。オネエさんたちのキスをホッペに受けながら、照れまくり至福の表情だった前田さんの顔が今も鮮やかに蘇る。

ヨコハマ映画祭20周年。そんな時に故人となった前田さんを顕彰するなんて信じられないことだが、クロサワでもキノシタでもヨドガワでもない、前田陽一さんに審査員特別賞をさしあげること、手前ミソながら、これがわが映画祭選考委員の、そしてわが実行委員会の心意気なのである。ヨコハマ映画祭は断固、前田陽一でなければならぬのだ。

ヨコハマ映画祭は前田さんをエコヒイキしたし、前田さんも映画祭をエコヒイキしてくれた。確信犯である。それが、あの魅惑の前田映画を過小評価し続けた愚かな世間への挑戦であるが故に —。

まだその早すぎた死にだけは恨みを一言云っておきたい。「それはないだろうよ。」と。

(ヨコハマ映画祭実行委)

特別招待作品 『皆 月』

“愛すること”って何だろう？ “生きること”って何だろう？
普遍のテーマを今、この世に生きるすべての人々に問う。

斎藤芳子

「みんな、月でした。がまんの限界です。さようなら」。

ある日、そんな謎の置き手紙を残し預金通帳と共に姿を消した妻。結婚生活は上手くいっていたはずなのに…。

エンジニアの諏訪はコンピューターおたくの冴えない四十男だ。仕事一筋で遊びを知らないままに四十を過ぎたころ、見合い結婚した沙夜子。彼女の失踪の原因について、諏訪にはまったく心当たりがない。

☆

数多くの映画ファンに支えられ、今年第20回を迎えるヨコハマ映画祭。その記念すべき招待作品として相応しいのは？ とスタッフ一同入魂の協議の結果、選ばれた作品は『皆月』。芥川賞受賞作家・花村萬月の原作をベテラン・荒井晴彦が脚本化。そして昨年度ヨコハマ映画祭監督賞に輝く

望月六郎監督がメガホンを取った99年度最高の話題作です。

☆

「どうしても沙夜子を取り戻したい」。

自分を捨てた妻への“変わらぬ思い”を自らの内に確認した諏訪は沙夜子の捜査を決意する。そして長年勤め上げた会社もやめ、沙夜子の弟であるヤクザ者・アキラの元に転がり込む。夜、アキラが義兄に語る姉・沙夜子の話。そこには諏訪が全く知ることのなかった彼女の一面があった。ある日、アキラは諏訪に由美というソープ嬢をあてがう。最初は諏訪の退職金目当てに近づいてきた由美だったが…。

アキラの紹介でヤクザの事務所でコンピューター操作の仕事をするようになった諏訪。相変わらずこの組織にも属さずひたすらアウトローな行き方をするアキラ。そして諏訪にとっては沙夜子以

外の初めての女性・由美。しばらくして彼女はソープをやめ、諏訪と一緒に暮らしはじめた。

妻の失踪をキッカケに、かって経験したことのない日々を送ることになる主人公・諏訪徳雄役に奥田瑛二。すでに『恋極道』などで大人の男の切なさや悲しさを表現した望月監督とのコンビネーションには定評がある。義弟・アキラ役には『鬼火』や『CLOSING TIME』などに出演。今夏には初主演作『日本黒社会 LEY LINES』が公開

となる新鋭・北村一輝。“世紀末に狂い咲いた男花”＝北村の演技に絶対注目。そして由美役をTVドラマ等で活躍する吉本多香美が体当たりで熱演、沙夜子役には演技派・萩野目慶子が扮している。

“絆”とは決して呼べない奇妙な縁で結ばれた諏訪とアキラ、そして由美。やがて三人は、沙夜子を追って突風吹き荒れる北陸・皆月を目指す！
(映画ライター)

特別招待作品 『大阪物語』

14歳の夏休み、大人に近づく旅に出る

小 張 アキコ

本日20回を迎えた映画ファンのための熱いまつり、ヨコハマ映画祭に、ようこそお越しくださいました。今日上映される『がんばっていきまっしょい』のワンシーンではありませんが、第1回の時、20年も先の映画祭の将来など誰も想像してはいなかったでしょう。その頃の私はヨコハマ映画祭と何の縁もない、“映画も好きな女の子”でした。このプログラムの巻末の受賞者リストを見ると、多くの映画人の名前が並んでいます。お亡くなりになられた方、映画界から遠ざかれた方々、そして今も華やかに活躍している頼もしい人たち。また阪本順治だけでなく、ヨコハマ映画祭から巣立った映画人がいます。今日あなたが座っている席に何年前か前、岩井俊二や松村克弥が腰掛けていたかもしれません。

20回の節目の特別招待作品として『大阪物語』が登場します。監督は市川準、主演は三井のリハウスのCMでおなじみの池脇千鶴。彼女の両親を沢田研二、田中裕子が演じます。売れない夫婦漫才コンビで女なんか作って、そのうちどこかへ行ってしまおうどうしようもない親父。池脇千鶴演じる霜月若菜は、親父を捜して大阪の町を歩き続けます。池脇千鶴はCMでは高校受験を終えたばかりの高校1年生ですが実際には高校2年生。なのに中学2年生を演じています。CMで見た通り小柄でセーラー服は似合うけどルーズソックスはちょっと…というタイプ。脚本は『二人が喋ってる』の犬童一心(町で意地悪同級生に会うくだりがリアルだった)。最初から最後まで出ずっぱり

の池脇千鶴は、中学2年生だった自分自身の近い過去を思い出しながら、若菜を一生懸命演じます。父親を知る人たちを訪ねての旅で、若菜は何度も彼女の知らなかった父に出会います。最後に病院で再会した時、父は何も言えずベットに横たわっているだけでした。

そういえば富田靖子の主演女優賞(第9回『BU・SU』)も、牧瀬里穂の新人賞や中嶋朋子の助演女優賞(第12回『つぐみ』)も受賞作は市川準作品でした。ですからヨコハマ初登場の市川準監督もしっかり映画祭に関わっていたんですね。

小津安二郎が『東京物語』を撮ったのが50歳の時。市川準監督も沢田研二もその年齢です。東京者の私には若菜がさまよう大阪の町がどの辺りなのかさっぱりわかりませんが、『大阪物語』の海は東京銀座生まれの私が『つぐみ』の時に感じた、築地辺りの海の香りと同じ匂いがするに違いありません。

大阪の飾り気のない、本音の温かさが私も好きです。映画の中に登場するミヤコ蝶々始め関西お笑い陣の演技に、本音の優しさが感じられます。

ヨコハマでワールド・プレビューされる『大阪物語』、日本映画の素晴らしさを、スターが誕生する瞬間を堪能してください。そしてラスト流れる尾崎豊のサウンドに、みなさんそれぞれの青春を感じてください。

(映画評論家)

'98年度 日本映画ベストテン

<選考委員>

秋石イソ	本原ガイ	鉄郁マサト	次子
市井	井義久	義久	
鶴飼	飼邦彦	邦彦	
内海	海陽子	陽子	
小野	野善太郎	善太郎	
加藤	藤功	功	
金子	川真由美	真由美	
金子	子正且	正且	
北川	川れい子	れい子	
小張	張アキコ	アキコ	
斎藤	藤芳子	芳子	
塩田	田時敏	時敏	
繁田	田健治彦	健治彦	
進藤	藤良彦	良彦	
鈴木	村たけし	たけし	
田中	中千世子	千世子	
塚崎	崎直美子	直美子	
津島	島令三	令三	
土田	田啓美智代	啓美智代	
坪内	内本直	本直	
寺本	脇研	研	
寺嶋	嶋啓介	啓介	
中永	田よしのり	よしのり	
中村	村勝則	勝則	
野村	村正昭	正昭	
服部	部義宏	義宏	
林田	田義卓	義卓	
星野	野卓也	卓也	
ます	村けいこ	けいこ	
松村	村晃	晃	
宮野	野洋己	洋己	
安田	田清一	清一	
山下	田下慧	下慧	
山田	田修	修	

(50音順)

秋本鉄次

- ①CURE キュア ②ショムニ ③ラブ・レター ④犬、走る DOG RACE ⑤極道懺悔録 ⑥中国の鳥人 ⑦狂わせたいの ⑧売春暴力団 ⑨アンラッキー・モンキー ⑩「A」

98年の邦画は例年よりも僕には満足感が少なかった。というのは、女優で見る映画があまりにも少なかったからだろう。個人賞もいつもは伊の一番に選びたい主・助演女優が最後まで残ってしまったのがその証拠だ。あまりにも“作家の映画”“男優の映画”に偏ると『女優で映画を見る』僕はサミシイ。もっと女優を!! でもギリギリに見た「ショムニ」の高島礼子はサイコーだあ!!

(映画評論家)

石原郁子

- ①「A」 ②CURE キュア ③犬、走る DOG RACE ④HANA-BI ⑤ヤマトナデシコ ⑥ねじ式 ⑦やわらかい肌 ⑧フレンチドレッシング ⑨帰ってきたドラえもん ⑩ポルノ・スター

「CURE」があまり怖くてほんとうに少しおかしくなってしまう、「蛇の道」「蜘蛛の瞳」「リング」「らせん」など観ることができなくなっていました。ごめんなさい。

(映画評論家)

イソガイマサト

- ①CURE キュア ②HANA-BI ③リング ④がんばっていきまっしょい ⑤カンゾー先生 ⑥蛇の道 ⑦いつものように ⑧ラブ&ポップ ⑨アートフル・ドチャース ⑩鬼畜大宴会

例年になくベストテンを選ぶのに苦労した年だった。だけど、黒沢清と中田秀夫の2監督、脚本の高橋洋さんに思いっきり怖がらせてもらったから大満足! 特に高橋さんの冷たく空虚な恐怖世界を、映画本来の映像と音の力で表現した2監督は本当にスゴい。スクリーンに映るもの、聴こえてくるものでイヤな気分になったし、何度もゾゾゾゾってさせられたもの。あと、『がんばっていきまっしょい』も98年に会ったかけがえのない作品。⑦~⑩は次回作への期待も込めて。

(フリーライター)

市井義久

- ①がんばっていきまっしょい ②CURE キュア
③愚か者 傷だらけの天使 ④キリコの風景
⑤生きない ⑥売春暴力団 ⑦緑の街 ⑧HAN
A-BI ⑨てなもんや商社 ⑩水の中の八月

実行委員会から送られたリストに表記された本数だけでも157本。全作品を見ている訳では無いが、その中から10本を選出するのに、一瞬で終わってしまった。それ程98年の10本は群をぬいている。「がんばっていきまっしょい」、欲望を制御し、ただひたすらドンケツから抜け出すことのみ描写を限定したのがベストワンの理由である。ベストテンのそれぞれについて、見た時の印象が今でもよみがえる。それ程一本一本との出会いが、私にとって幸福でした。

(宣伝プロデューサー)

鶴飼邦彦

- ①愛を乞うひと ②がんばっていきまっしょい
③THE GROUND 地雷撤去隊 ④売春暴力団
⑤卓球温泉 ⑥リング ⑦四月物語 ⑧SF サ
ムライ・フィクション ⑨大怪獣東京に現わる
⑩狂わせたいの

「愛を乞うひと」で原田美枝子演じる母親像は、今迄の日本映画では描かれたことのない強烈なキャラクターだ。何故あれだけ娘に暴力を振るうのか、過去どんな人生を生きて来たのか全く説明していないのがこの作品の魅力なのだ。

「THE GROUND 地雷撤去隊」は製作費たったの2千万円という超低予算ながらカンボジアでオールロケし、日本人スタッフ3人、出演者3人、あとは全部現地調達という自主映画以下の条件をもとせず、室賀厚監督はハリウッド映画顔負けの一級娯楽作品を造り上げた。

(映画編集者)

内海陽子

- ①犬、走る DOG RACE ②CURE キュア
③時雨の記 ④HANA-BI ⑤てなもんや商社
⑥ポルノ・スター ⑦愚か者 傷だらけの天使
⑧キリコの風景 ⑨大安に仏滅!? ⑩岸和田少年
愚連隊 望郷

賞が作品を待っている、と感じることがある。賞は壺のようなものだ。すぐれた作品ははいるべ

き壺を心得ており、ヨコハマの壺は映画ファンの純真な心そのものであり続けてきた。個人的には「犬、走る DOG RACE」など出演作6本がベストテン入りを果たした大杉漣さんを、最も壺を心得た“目利き”と讃えたい。彼の出演作を語れば日本映画の“今”を語れるはずだ。壺にはいった作品と目利きたちに励まされ、ヨコハマの映画旅は続く。

(映画評論家)

小野善太郎

- ①麗猫伝説<劇場版> ②踊る大捜査線 THE
MOVIE ③ねじ式 ④犬、走る DOG RACE
⑤ヒロイン! ⑥ザ・ハリウッド ⑦狂わせたい
の ⑧銃爪 ⑨リング ⑩CURE キュア

1999年、終わりの始まりの時という予感がしていたとはいえ、早々に1月末をもって、わが大井武蔵野館は閉館となってしまいました。いつも来ていただいた皆さん、ありがとう。1981年のオープン以来、17年半の長き(短き?)に渡って、日本映画再評価を目標に奮闘して来ましたが、それを考えると、このヨコハマ映画祭が20年目を迎えて存続していることは実に大変なことだと、改めて思う次第。私も、また頑張るつもり。

(元・大井武蔵野館支配人)

加藤 功

- ①F [エフ] ②がんばっていきまっしょい
③CURE キュア ④スレイヤーズごうじゃす
⑤SADA ⑥カンゾー先生 ⑦ラブ&ポップ
⑧時雨の記 ⑨ヒロイン! ⑩HANA-BI

作品は次点にしてしまったが、「汚れた女(マリア)」の諏訪太朗は凄い。中年男の生活臭をこんな風に表現できるとは。表情の、動作の、台詞の一つひとつが東映時代の高倉健に匹敵するヘヴィネスを湛えている。花くまゆうさくの漫画に出てくるオッサンのような風貌もマル。

選んだ後に見た「ショムニ」がとても面白い。鈴木清順の映画ばりに怪しげな人物、風景の間を右往左往する遠藤久美子の“不思議の国のアリス”ぶりが楽しい。

(ヨコハマ映画祭実行委)

金川 真由美

- ①ラブ・レター ②TOKYO EYES ③時雨の記 ④HANA-BI ⑤学校Ⅲ ⑥CURE キュア ⑦生きない ⑧ヤマトナデシコ ⑨不夜城 ⑩岸和田少年愚連隊 望郷

平均すると一年で“1.3日に1本”の映画を見ている勘定になる。多いのか少ないのか、まさしく玉石混淆といったあんばい。日本映画にもいっばいのギョクがありました。こぼれてしまったアレコレにも愛着はひとしお。面白くても面白くなくても、いいものはいい。娯楽映画ばかりが面白さの基準ではないと思います。エモーションを高まらせてくれた映画が、私にとっての“いい映画”。それっきゃない。

(「RAYON」誌編集長)

金子 正且

- ①愛を乞うひと ②ラブ・レター ③キリコの風景 ④ねじ式 ⑤愚か者 傷だらけの天使 ⑥てなもんや商社 ⑦HANA-BI ⑧中国の鳥人 ⑨不夜城 ⑩がんばっていきまっしょい

「キリコの風景」と「てなもんや商社」の小林聡美の自然体の演技がとても良くて女優主演賞と思ったがやはり「愛を乞うひと」の原田美枝子の迫力ある強い演技がどうにも目を引きつけてしまう。でも小林聡美もいい女優です。ベストテンからはみ出したが「犬、走る DOG RACE」も「カンゾー先生」それに「ユキエ」「ザ・ハリウッド」などもとても好きな作品だ。

(ヨコハマ映画祭審査委員長)

北川 れい子

- ①愛を乞うひと ②中国の鳥人 ③がんばっていきまっしょい ④CURE キュア ⑤愚か者 傷だらけの天使 ⑥踊る大捜査線 THE MOVIE ⑦HANA-BI ⑧てなもんや商社 ⑨キリコの風景 ⑩ザ・ハリウッド

社会的にも状況的にもササクレた年だったせいかな、人間や人生を肯定した作品に心が傾いた年だった。「愛を乞うひと」はその完成度といい、脚本の面白さ、俳優の演技ともズバ抜けて面白かった。「CURE キュア」や「HANA-BI」は両監督の集大成として見応えがあった。「てなもんや商社」と「ザ・ハリウッド」はとにかく映

画の性格がいい。「フレンチ・ドレッシング」「狂わせたいの」も面白い性格で入れたかった。ゴメンナサイ。

(映画評論家)

小張 アキコ

- ①HANA-BI ②学校Ⅲ ③ルイズ その旅立ち ④愛を乞うひと ⑤がんばっていきまっしょい ⑥リング ⑦らせん ⑧TOKYO EYES ⑨ラブ・レター ⑩一生、遊んで暮らしたい

ヨコハマ映画祭20回おめでとうございます。リストに「TOKYO EYES」(フランスで認められていない)や「ルイズ その旅立ち」を入れてくれるヨコハマは凄い!

98年、偉大な映画人がこの世を去っていきました。「踊る大捜査線 THE MOVIE」こそ、90年代の大衆娯楽映画だと思います。原田美枝子はすでに大女優ですね。新人女優陣では「がんばっていきまっしょい」5人組、麻生久美子、締め切り後に見た「ショムニ」の遠藤久美子らの将来に期待したい。男優は「学校Ⅲ」の黒田勇樹の好演が忘れられません。

最後に『パリ 映画とバレエに魅せられて』(女園社)という本を出しました。読んでね。

(映画評論家)

斎藤 芳子

- ①愚か者 傷だらけの天使 ②BLUES HARP ③中国の鳥人 ④犬、走る DOG RACE ⑤CURE キュア ⑥ベル・エポック ⑦愛を乞うひと ⑧F〔エフ〕 ⑨緑の街 ⑩落下する夕方

“映画は娯楽”との原点に帰り観客を大いに楽しませてくれた「愚か者〜」。かつての日本映画にはなかったテイストで次々に話題作を世に送り出す三池崇史監督の「BLUES HARP」や「中国人の鳥人」。そして歌舞伎町で生きる雑多な人間たちの姿を鮮烈に描いた「犬、走る〜」など。本年度も単館系の作品は本当に個性的で面白かった。そしてこれらの映画に出演している俳優さんたち(鈴木一真・田辺誠一・本木雅弘・岸谷五朗など)は皆ドラマと映画両方の仕事をそれぞれ絶妙のバランスでやっているのがまた面白い。

(映画ライター)

塩田 時敏

- ①フレンチドレッシング ②CURE キュア
③岸和田少年愚連隊 望郷 ④狂わせたいの
⑤ラブ&ポップ ⑥BLUES HARP ⑦ねじ式
⑧愚か者 傷だらけの天使 ⑨不夜城 ⑩大怪獣
東京に現わる

自ら“時敏会会長”と名乗ってくれている三池崇史監督。ありがとさんです。だから言うわけではないが、'98の三池崇史の活動ぶりは凄かった。本数だけこなしている監督なら実は他にもいるが、その三池作品のクォリティの高さとボルテージには舌を巻きっぱなしだ。三池組とも言うべきNAKA雅MURA、山本英夫の仕事ぶりにも目を見張る。ベイスターズを先頭に、何かヨコハマが目立った年だったが、三池崇史もそう、ヨコハマ放送映画専門学院（現、日本映画学校）出身なのである。

（映画評論家）

繁田 健治

- ①SADA ②F [エフ] ③PERFECT BLUE
④風の歌が聴きたい ⑤四月物語 ⑥ラブ&ポップ
⑦「A」 ⑧ねじ式 ⑨SF サムライ・フィクション ⑩キリコの風景

「SADA」「風の歌が聴きたい」とも私としてはどちらかといえば見たいと思わない素材（上映時間も長めだし）だが、前者は「HOUSE」を彷彿させる映像（おまけに尾道シリーズにつながる情感もしっかりある）、後者は正攻法の展開で見せ切ってしまう。

こんな時、自分は大林映画の観客でよかったと思う。（まあこの人の場合は見るまでわからないので、観客でなければよかったと思うこともあるが）

98年は「麗猫伝説」の待望の劇場公開（大井武蔵野館ありがとう）、「三毛猫ホームズの推理・ディレクターズカット版」もあり、まさに大林イヤーであった。

（自主映画作家）

進藤 良彦

- ①踊る大捜査線 THE MOVIE ②ラブ&ポップ
③映画クレヨンしんちゃん 電撃！ブタのヒツメ大作戦 ④CURE キュア ⑤新生 トイレの花子さん ⑥機動戦艦ナデシコ ⑦風の歌が聴き

たい ⑧ウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナ ⑨大安に仏滅!? ⑩らせん

公私ともに「踊る大捜査線 THE MOVIE」で明け暮れた1年だった。こちらの過剰な期待にも余裕で応えてくれる作品ができあがり、なおかつそれが大ヒットしたことは至上の幸福である。「踊る」だけでなく、上位3本は全く横一線の傑作。そして、別に意図したわけではないが、僕のベストテンにはエンターテインメントを強く意識させる作品が並んだ。一見、無関係そうな ② ④ ⑩ なども決して娯楽性に背を向けたものではなく、むしろそれを強く意識したがゆえの作品だった。

（フリーライター）

鈴村 たけし

- ①愛を乞うひと ②ラブ・レター ③がんばっていきまっしょい ④時雨の記 ⑤愚か者 傷だらけの天使 ⑥F [エフ] ⑦踊る大捜査線 THE MOVIE ⑧ねじ式 ⑨CURE キュア ⑩キリコの風景

ごヒキ筋だった平山秀幸の大爆発した「愛を乞うひと」は、堂々たる風格の10年に1本の名作だ。“これが映画だ”としたたかに思い知らされた。昨年の外国映画でもこれに匹敵する秀作は見当たらない。平山秀幸は世界の頂点に立つ映画作家になったと断言する。

森崎、澤井、石井のベテラン勢、磯村、阪本、金子、黒沢の中堅勢がそれぞれにいい仕事をした。拍手拍手。

（ヨコハマ映画祭実行委）

田中 千世子

- ①中国の鳥人 ②てなもんや商社 ③キリコの風景 ④Beautiful Sunday ⑤がんばっていきまっしょい ⑥愛を乞うひと ⑦ねじ式 ⑧フレンチドレッシング ⑨プライド 運命の瞬間 ⑩SF サムライ・フィクション

1位から4位は私の中では同じ色の映画たちだ。「中国の鳥人」のカメさん、「てなもんや商社」の笑うこいのぼりが傑作。

新人監督賞は、初の劇場用映画（35ミリ）をつくったことを祝して斎藤久志に。

（映画評論家）

塚崎直美

- ①犬、走る DOG RACE ②HANA-BI
③てなもんや商社 ④がんばっていきまっしょい
⑤落下する夕方 ⑥JOKER 疫/病/神
⑦「A」 ⑧愛を乞うひと ⑨お墓がない!
⑩絆-きずな-

忙しくてどうしても時間がつくれず、現時点では「時雨の記」「踊る大捜査線 THE MOVIE」を見ておりません。気になるけれど…。コワイのがイヤで「リング」「らせん」をパスしてしまったバカな私…。

黒澤明、淀川長治両氏が亡くなり、松竹はガタガタしている。そんな悲しいこともあるけれど作品的には案外、粒揃いだったのでは？

(翻訳家)

津島令子

- ①愛を乞うひと ②がんばっていきまっしょい
③愚か者 傷だらけの天使 ④HANA-BI
⑤ザ・ハリウッド ⑥四月物語 ⑦BLUES
HARP ⑧岸和田少年愚連隊 望郷 ⑨ラブ・レター
⑩キリコの風景

'98年は大作としては「愛を乞うひと」「学校Ⅲ」などが印象深かったが、低予算ながら「ザ・ハリウッド」がものすごく良かった。全編にあふれる映画への想いと愛情、見ていて自分と映画とのかかわりや好きな映画などが次々と思い出され、とても心が暖まった。予算がないため宣伝費もあまりかけられず、私の回りの人も見てない人が結構いるのですが、是非一度は見て欲しい映画です。

(女優)

土田啓三

- ①がんばっていきまっしょい ②愛を乞うひと
③絆-きずな- ④犬、走る DOG RACE
⑤リング ⑥ラブ・レター ⑦CURE キュア
⑧四月物語 ⑨HANA-BI ⑩SADA

今年は順当なところでは「愛を乞うひと」がベストワンなのだが、締切ギリギリに見た「がんばってー」が、私の生涯の青春映画No.1「青春デンデケデケデケ」（どちらも私の故郷・四国を舞台にしているという点も共通している）にも似た青春奮闘編として爽やかな感動を与えてくれたので、ゴール間際の逆転劇となった。しかしほと

んどハナの差である。「愛をー」は、原田美枝子の二役を使い分けた演技も凄いが、2人の原田が共演するラストのSFXも驚嘆すべき出来である。我が国もやっとSFでもホラーでもない文芸作品に特殊効果を絶妙に利用するようになってきた。その事だけでも記憶にとどめたい。

「リング」は、久しぶりにホントにコワイ作品であった。それにしてもこの1年で三船も黒澤も、前田陽一も淀川さんも亡くなってしまった。本当にさびしいことである。

(会社員)

坪内美智代

- ①愚か者 傷だらけの天使 ②汚れた女 背徳の日々
③愛を乞うひと ④ラブ&ポップ
⑤CURE キュア ⑥中国の鳥人 ⑦黒の天使
Vol.1 ⑧アンラッキー・モンキー ⑨D坂の殺人事件
⑩犬、走る DOG RACE

たまらなく愛おしかったり、呆けたように口をあけたまま心を奪われていたり、単に無防備なだけかもしれないが、一箇所でも自分の急所を衝かれたりしていると、ただそれだけでその映画が忘れられなくなる。

どんなに繁雑な日常を過ごしていても、映画の余韻は静かに体の中に残っている。ありがたいことです。このつきあいはやめたくない。まだまだ未熟なわたしですが、これからもどうかよろしく。

(事務員)

寺本直未

- ①がんばっていきまっしょい ②踊る大捜査線
THE MOVIE ③愚か者 傷だらけの天使
④犬、走る DOG RACE ⑤F〔エフ〕
⑥カンゾー先生 ⑦CURE キュア ⑧イノセント・ワールド
⑨新生 トイレの花子さん
⑩ラブ&ポップ

'98年、個人的に「目から鱗」の思いを抱いたのは、「がんばっていきまっしょい」と「踊る大捜査線 THE MOVIE」である。両者は180°違うタイプの作品ながら、そのストライク・ゾーンの決め方、そこへ直球を投げる肩の強さ、みたいなものを見せつけてくれたと思う。

ベストテンの3位~7位までは、それぞれの作品のテーマと監督の色がフィットし、心にくさび

を打ちこんでくれた。

「緑の街」「てなもんや商社 満福貿易商社」も捨て難い作品でした。

(映画ライター)

寺 脇 研

- ①愚か者 傷だらけの天使 ②がんばっていきまっしょい ③一生、遊んで暮らしたい ④ラブ & ポップ ⑤ネプチューン in どつきどつかれ ⑥BLUES HARP ⑦犬、走る DOG RACE ⑧岸和田少年愚連隊 望郷 ⑨ JUNK FOOD/ジャンク フード ⑩時雨の記

前作には疑義を呈さざるを得なかったが、『愚か者』は文句なしの秀作だ。『がんばって…』は「爽やかな青春」などという通り一遍の賛辞を超えた深みのある一作で、この二本が98年の双璧。中場利一原作の三本など他にも佳作が多く、映画館通いが苦にならぬ盛況だった。ここに選んだ以外では『迷い猫』『蛇の道』『蜘蛛の瞳』『黒い天使』『中国の鳥人』の名を挙げておきたい。なお一方で、『HANA-BI』『愛を乞うひと』『CURE』には不満を感じたことを付言しておく。

(映画評論家)

中 嶋 啓 介

- ①CURE キュア ②キリコの風景 ③時雨の記 ④JUNK FOOD/ジャンク フード ⑤犬、走る DOG RACE ⑥岸和田少年愚連隊 望郷 ⑦愚か者 傷だらけの天使 ⑧鬼畜大宴会 ⑨ SF サムライ・フィクション ⑩ HANA-BI
ベテランも新人も頑張っている。ジャンルもバラエティに富み、百花繚乱の趣だ。シリーズ物語の「岸和田…」「傷だらけ…」も良い調子で今年一杯、楽しめた。ベストテンの枠がもうひとつ欲しい。

その中で、特に「キュア」はピカーで、観たのは1年前になるのにいろんなシーンが蘇る。画面の、出演者の動作のひとつひとつは怖くない。これにサウンドが重なり、カットが繋がってくるとどんどん怖くなる。客観的＝観客な視点を持つてははずと思ってた人物までおかしいと思えてくる。日常から始まった映画の世界は正常な人が居なくなり、全員が異次元の世界へ行ってしまう。

映画が終わり、外に出て、雑踏の中を歩いている。異次元と思った世界は自分と回りの人の心の中に薄皮一枚のカバーを被って在るんだと思う。洋画だと始めから違う所だと観ているが、見慣れた風景の中で語られる邦画では現実の世界とスムーズに繋がって来る。

不思議な体験をした。

(会 社 員)

永田 よしのり

- ① CURE キュア ②リング ③大怪獣東京に現わる ④ウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナ 光の星の戦士たち ⑤愛を乞うひと ⑥踊る大捜査線 THE MOVIE ⑦HANA-BI ⑧生きない ⑨アンラッキー・モンキー ⑩流れ者凶鑑

都合で1位から10位までの順位をつけてはいるが、そのどれもがある意味では私の中では1位と言ってもいい今年の選考だった。今年は去年の「もののけ姫」のようにメチャクチャ大ヒットした作品はなかったが、それゆえにヴァラエティに富み、映画製作の可能性を改めて示唆する作品ばかりが心に残った1年だった。あえて言えばTVドラマが出発点の『踊る大捜査線 THE MOVIE』の結末に「来年の春からの前フリか」と思わされてしまったが“映画的”にノセられていただけに嫌だった。もしも今後テレビで再開されることがなかったら、それは私の思い過ごしであるのだが…。

(映画よろず屋)

中 村 勝 則

- ①がんばっていきまっしょい ②蛇の道 ③中国の鳥人 ④犬、走る DOG RACE ⑤極道懺悔録 ⑥しあわせになろうね ⑦生きない ⑧愚か者 傷だらけの天使 ⑨狂わせたいの ⑩痴漢電車・弁天のお尻

ヨコハマ映画祭の選考委員に参加して早10年。この10年間に日本映画の状況もいろいろと変わってきたが、残念ながら98年は低調な年だったように思う。それだけに今年“ヨコハマらしさ”を特に意識し、おそらく各映画賞を独占するであろう『HANA-BI』『愛を乞うひと』はあえて外した。となると単館公開の作品ばかりになってし

まったではないか！唯一『踊る大捜査線 THE MOVIE』を未見のままなのが心残りであるが、メジャー（特に松竹と東映）は、観客の心を引く映画とは何なのをもっと本気で考えてもらいたい。

（シネマライター）

野村正昭

①踊る大捜査線 THE MOVIE ②がんばっていきまっしょい ③犬、走る DOG RACE ④風の歌が聴きたい ⑤蜘蛛の瞳 ⑥愚か者 傷だらけの天使 ⑦F〔エフ〕 ⑧SF サムライ・フィクション ⑨D坂の殺人事件 ⑩てなもんや商社

ヨコハマ映画祭20周年おめでとう。そして横浜文化賞奨励賞受賞おめでとう。この20年間の受賞者の方々の笑顔や表情がキラ星のごとく思い出されます。ヨコハマ映画祭は確実に日本映画界を元気づけ活性化させたことに間違いありません。実行委員の方々の努力に敬服します。さて「HANA-BI」にも「愛を乞うひと」にも「カンゾー先生」にも、あえて背を向けた小生のベストテン。「踊る大捜査線 THE MOVIE」を見てからTV版をビデオで見て、のめりこむ今日この頃です。

（映画評論家）

服部 宏

①HANA-BI ②愚か者 傷だらけの天使 ③絆-きずな- ④四月物語 ⑤時雨の記 ⑥生きない ⑦がんばっていきまっしょい ⑧犬、走る DOG RACE ⑨踊る大捜査線 THE MOVIE ⑩CURE キュア

「HANA-BI」で始まった1998年は、実り豊かな年だった。新しい才能が次々に登場し、沢井信一郎、根岸吉太郎、荒井晴彦、阪本順治らベテランと中堅が頑張った。選外になったが「F」や「大安に仏滅!」「ユキエ」「ラブ・レター」も心に残る。大作の間を埋める小品に佳作が何本もあり、邦画界の層が厚くなったことを感じさせる。

昨年閉館した並木座は、わが青春のオアシスだった。金子正且さん、長い間ありがとうございました。

（神奈川新聞文化部編集委員）

林田義行

①踊る大捜査線 THE MOVIE ②リング ③アンドロメディア ④CURE キュア ⑤ラブ&ポップ ⑥らせん ⑦BLUES HARP ⑧蛇の道 ⑨生きない ⑩超いんらん 姉妹どんぶり

遅ればせながら再放送で初見したTV「踊る大捜査線」には大きな衝撃を受けた。映画版がシリーズ最高の完成度だったとは言い切れないが、その集大成であるこの作品への一票はTVシリーズを含めた称賛として揺るぎない。公開半月後の平日初回にも関わらず世代を越えた観客で埋めつくされた映画館で得た、本当に久しぶりに味わった共有体験の笑いと涙。初めて映画館に足を踏み入れてから約二十年、そんな独特の空気があるからこそ、数々の映像メディアの中で「映画」だけを特別扱いすることが出来るんだと改めて認識し、今年も全くの個人的好みの羅列ながらこの映画祭に参加させて戴きました。

（ライター）

星野卓也

①ラブ&ポップ ②キリコの風景 ③がんばっていきまっしょい ④絆-きずな- ⑤HANA-BI ⑥愚か者 傷だらけの天使 ⑦リング ⑧CURE キュア ⑨愛を乞うひと ⑩いつものように

スガシカオ作詞の『夜空ノムコウ』で僕の98年は始まった。“♪あの頃の未来に僕は立っているのかなぁ”のフレーズが繰り返し頭の中を回り続けた。だからなのか、僕らがあがきながら生きている「現代」を掬い取った映画に心魅かれた。

①はその中でも群を抜いていた。かつての幾つかのコギャル映画にはなかった思想がここにはある。終わらない日常をいかに生きるべきなのか、思索の後がここには見える。そして、エヴァの帰結よりもずっとポジティブな、未来への希望や提示がここにはあるような気がする。なにより汚水の流れる下水道を4人の少女が意気揚々と歩いてゆくラストには、鳥肌が立つ程のカタルシスを感じた。②は「あなたに愛想を尽かされた僕は、今はこんなにも改心して頑張ってるんだ」という男なら誰でも願う棄てられた女性に対する美しい別れ方、正しい乗り越え方、成長の仕方を、迷いや弱さも含めて、きっちり描いている。でも、現

実はもう少し非情で、キリコのような女神はいないから、やっぱりこれは「シアワセなサヨナラ」なのかもしれない。

(ライター)

前田 芳江

①CURE キュア ②HANA-BI ③JUNK FOOD/ジャンク フード ④四月物語 ⑤リング ⑥ラブ・レター ⑦鬼畜大宴会 ⑧愚か者 傷だらけの天使 ⑨ねじ式 ⑩S F サムライ・フィクション

今までの映画観にとらわれない個性的な作品が多かった'98年。なかでも一番衝撃的だったのは黒沢清監督の「CURE キュア」でしょう！サイコホラーという今っぽいジャンルと眩暈がするような構成・映像。コワさ、面白さ、密度の濃さと文句なしに一番だと思います。あと個人的に押したいのが「JUNK FOOD」。今の東京をここまで魅力的にリアルに描いたものはないんじゃないでしょうか？ この日本らしさと'90年代後半らしさは貴重です。

(雑誌編集者)

ますだ けいこ

①がんばっていきまっしょい ②時雨の記 ③HANA-BI ④愛を乞うひと ⑤中国の鳥人 ⑥犬、走る DOG RACE ⑦ラブ・レター ⑧冷たい血 AN OBSESSION ⑨ねじ式 ⑩JOKER 疫/病/神

1年間心身共にズタズタの状態でも、地を這うようにして映画館に向いてしまうのが映画ファンの性なのだろうか。喜ぶべきか悲しむべきか、それが問題だ。

そんな中で見た作品群で、もっとも心の琴線に触れたのが『HANA-BI』。自分のしてきたことを踏まえた上で、どのように人生にケリをつけるかってことも人間にとっては重要なんだと、ふと自らの身の上に重ねてみたりした……が、選考締切の直前に見た作品に、『がんばっていきまっしょい』と元気づけられた。

やっぱり人生において、映画は不可欠だ。

(イラストライター)

松村 晃

①四月物語 ②リング ③HANA-BI ④極道懺悔録 ⑤プライド 運命の瞬間 ⑥絆-きずな- ⑦ラブ・レター ⑧カンゾー先生 ⑨ねじ式 ⑩愛を乞うひと

60分弱の至福の時間を徐々に味わった「四月物語」。むずがゆく生暖かいノスタルジックな気分にとっぷりひたり切った映画でした。もう「大好きだい！」の映画であります。

「愛を乞うひと」は先ずGOサインをだした東宝に拍手を！ 二役じゃなく三役をも演じた原田美枝子に乾杯!! そして古き良き昭和を再現し、クールにクールに、まるでマカロニ・ウエスタンの対決の如く母娘を描いた平山秀幸に脱帽!!

(“シネマ自由区”店主)

宮野 洋己

①CURE キュア ②ラブ&ポップ ③アンラッキー・モンキー ④狂わせたいの ⑤D坂の殺人事件 ⑥中国の鳥人 ⑦ねじ式 ⑧黒の天使 Vol.1 ⑨HANA-BI ⑩JUNK FOOD/ジャンク フード

「狂気は狂人のものではなく普通の人間の行動の中に潜んでいる」という名コピーの「CURE キュア」がその完成度においてだんとつのBEST 1でした。時代のトレンドコギャルをリアルな空気で表現した「ラブ&ポップ」。走るサブ監督のシニカルワールド「アンラッキー・モンキー」と続き、注目は「狂わせたいの」斬新で独創的なカルト色豊かな世界に酔いしれた超マジでイケている石橋監督に拍手喝采!

(会社員)

安田 清一

①愚か者 傷だらけの天使 ②HANA-BI ③絆-きずな- ④風の歌が聴きたい ⑤ラブ・レター ⑥アンドロメディア ⑦ラブ&ポップ ⑧中国の鳥人 ⑨生きない ⑩踊る大捜査線 THE MOVIE

映画は観客の人生を写す鏡だ。「愚か者」を見終った後、そんな言葉が浮んだ。主人公の真木蔵人と同じように数々の衝突を繰り返して職場を転々とした。その愚かさに自分を重ねて終始笑えて仕方なかった。「タイタニック」が何度も見るリ

ピーター達で未曾有の大記録を打ち立てる中、さして話題にもならず忘れ去られてしまう映画がたくさんある。見る見ないは人の好みに委ねざるを得ない事であるが、たまには和食という日もあるように日本映画も、もう少しだけでいい愛してほしい。今まで自分が迎ってきたもの何でもいい、それを日本映画にも見い出してもらえたらいい作品はあるはず。故黒澤明に背を向けた当映画祭であるが、氏の偉大さを改めて見直す一方で北野武、阪本順治氏達がクロサワに替ってこれからの日本映画を盛り返してほしい。まだまだこれからです日本映画は。

(サインシート施工請負業)

山下 慧

- ①ラブ&ポップ ②HANA-BI ③リング
④映画クレヨンしんちゃん 電撃!ブタのヒヅメ大作戦 ⑤四月物語 ⑥キリコの風景 ⑦CURE キュア ⑧がんばっていきまっしょい⑨ラブ・レター ⑩踊る大捜査線 THE MOVIE

案の定、ようやく『HANA-BI』が正式公開された98年の日本映画状況を、去年騒ぐだけ騒いでしまったやつらは今さら語ろうとしない。それは逆に日本映画を貶めることなただけ。そんな方面とかかわりなく、今年もまたここ数年と同じ

く充実と問題とを抱え続けている。— などと言うのももう飽きたか。上の10本がそうとは言わないが、案外な手堅さをもっと評価したくなる98年でした。いや、小さくまとまろうということじゃなく。

(ライター)

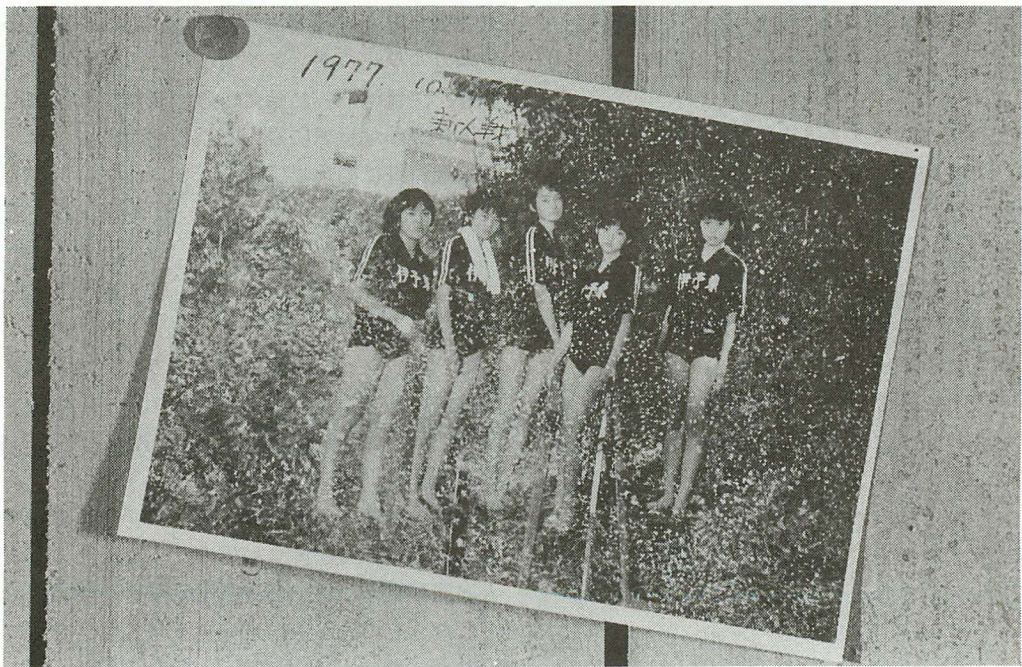
山田 修

- ①CURE キュア ②愛を乞うひと ③がんばっていきまっしょい ④キリコの風景 ⑤ポルノ・スター ⑥生きない ⑦黒の天使 Vol.1 ⑧アンラッキー・モンキー ⑨PERFECT BLUE ⑩蛇の道

黒沢清監督のここ数年の疾走ぶりに眼を見はらずにいられない。「CURE」は良心・善意・ヒューマニズムを取っ払った人間の危うさを焦り・不安・恐れを伴い描ききっている。犯人がつかまってるの一件落着でない、一般の人が持つ闇の世界は混沌とした現代をかなり反映しているのでは。

他の9本もテーマをないがしろにせず抑制された感触が共通していて、そこから独自の世界観が浮かび上がってゆく。船が沈没せずとも、隕石が衝突せずとも映画の味は決して損なわれていない。その存在価値の思いも込めて。

(会社員)



個人賞得票数

★監督賞

黒沢清	8票
磯村一	8票
平山秀	7票
北野武	3票

★新人監督賞

庵野秀明	7票
清水浩	4票
本木克英	4票
豊田利晃	3票
宮坂武志	3票

★脚本賞

君塚良一	6票
鄭義一	5票
磯村一路	5票
森田芳光	4票
黒沢清	4票

★技術賞

長田勇市(撮影)	12票
山本英夫(撮影)	6票
中澤克巳(美術)	5票
藤沢順一(撮影)	4票
柴崎幸三(撮影)	3票

★主演男優賞

中井貴一	9票
真木蔵人	9票
織田裕二	3票
萩原聖人	3票
役所広司	3票
本木雅弘	3票

★主演女優賞

原田美枝子	15票
小林聡美	4票
中江有里	3票

★助演男優賞

大杉漣	21票
萩原聖人	5票
渡辺謙	2票
國村隼	2票

★助演女優賞

吉行由実	7票
大楠道代	6票
岸本加世子	4票
麻生久美子	3票
倍賞美津子	3票

★最優秀新人賞(連記)

田中麗奈	22票
三輪明日美	9票
麻生久美子	9票
富樫真	7票
熊川哲也	4票
野波麻帆	4票
山本未来	4票

★特別大賞

該当者なし	10票
澤井信一郎	3票
今村昌平	2票
黒沢清	2票
故・淀川長治	2票

★審査員特別賞

「踊る大捜査線 THE MOVIE」 の製作チーム	6票
故・前田陽一監督	5票
「ねじ式」の製作チーム	2票
故・淀川長治	2票

第20回 ヨコハマ映画祭

選考委員(50音順)		秋本	石原	インガイ	市井	鶴飼	内海	小野	加藤	金川	金子	北川	小張	斎藤	塩田	繁田
作	品名															
1	CURE キュア	10	9	10	9		9	1	8	5		7		6	9	
2	がんばっていきまっしょい			7	10	9			9		1	8	6			
3	HANA-BI		7	9	3		7		1	7	4	4	10			
4	愚か者 傷だらけの天使				8		4				6	6		10	3	
5	愛を乞うひと					10					10	10	7	4		
6	犬、走る DOG RACE	7	8				10	7						7		
7	ラブ&ポップ			3					4						6	5
8	リング			8		5		2					5			
9	踊る大捜査線 THE MOVIE							9				5				
10	中国の鳥人	5									3	9		8		
11	ラブ・レター	8								10	9		2			
11	キリコの風景				7		3				8	2				1
13	時雨の記						8		3	8						
14	四月物語					4										6
15	ねじ式		5					8			7				4	3
16	F [エフ]								10					3		9
17	絆-きずな-															
18	てなもんや商社				2		6				5	3				
19	生きない				6					4						
20	BLUES HARP													9	5	
21	狂わせたいの	4				1		4							7	
21	風の歌が聴きたい															7
23	岸和田少年愚連隊 望郷						1			1					8	
24	カンゾー先生			6					5							
24	極道懺悔録	6														
24	「A」	1	10													4
27	アンラッキー・モンキー	2														
27	JUNK FOOD ジャンク フード															
27	蛇の道			5												
30	フレンチ・ドレッシング		3												10	
31	売春暴力団	3			5	7										
31	学校Ⅲ									6				9		
31	映画クレヨンしんちゃん 電撃! 7人のヒメ 大作戦															

1998年度 日本映画集計表

進藤	鈴木	田中	塚崎	津島	土田	坪内	寺本	寺脇	中嶋	永田	中村	野村	服部	林田	星野	前田	まさだ	松村	宮野	安田	山下	山田	合計
7	2				4	6	4		10	10			1	7	3	10			10		4	10	171
	8	6	7	9	10		10	9			10	9	4		8		10				3	8	161
			9	7	2				1	4			10		6	9	8	8	2	9	9		136
	6			8		10	8	10	4		3	5	9		5	3				10			118
	10	5	3	10	9	8				6					2		7	1				9	111
			10		7	1	7	4	6		7	8	3				5						97
9						7	1	7						6	10				9	4	10		81
					6					9				9	4	6		9				8	71
10	4						9			5		10	2	10						1	1		66
		10				5					8						6		5	3			62
	9			2	5												4	4		6	2		61
	1	8		1					9						9						5	7	61
	7							1	8				6				9						50
				5	3								7			7		10			6		48
	3	4														2	2	2	4				44
	5						6					4											37
			1		8								8		7			5		8			37
		9	8									1											34
									3	4			5	2						2		5	31
				4				5						4									27
											2								7				25
4												7								7			25
				3				3	5														21
							5											3					19
												6						7					19
			4																				19
					3					2									8			3	18
								2	7							8			1				18
											9			3								1	18
		3																					16
																							15
																							15
8																					7		15

ヨコハマ映画祭個人賞足跡

■ 作 品 賞 ■

- 第1回 太陽を盗んだ男
- 第2回 ツィゴイネルワイゼン
- 第3回 の・ようなもの
- 第4回 転校生
- 第5回 家族ゲーム
- 第6回 麻雀放浪記
- 第7回 ラブホテル
- 第8回 ウホッホ探検隊
- 第9回 ゆきゆきて、神軍
- 第10回 ロックよ、静かに流れよ
- 第11回 どついたるねん
- 第12回 櫻の園
- 第13回 あの夏、いちばん静かな海。
- 第14回 シコふんじゃった。
- 第15回 月はどっちに出ている
- 第16回 トカレフ
- 第17回 Love Letter
- 第18回 キッズ・リターン
- 第19回 鬼 火
- 第20回 CURE キュア

■ 監 督 賞 ■

- 第1回 長谷川和彦／曾根中生
- 第2回 鈴木清順
- 第3回 根岸吉太郎
- 第4回 高橋伴明
- 第5回 森田芳光
- 第6回 池田敏春
- 第7回 相米慎二
- 第8回 那須博之
- 第9回 原一男／梶間俊一
- 第10回 長崎俊一／金子修介
- 第11回 北野 武
- 第12回 中原 俊
- 第13回 北野 武
- 第14回 周防正行
- 第15回 崔 洋一
- 第16回 阪本順治
- 第17回 岩井俊二／金子修介
- 第18回 周防正行
- 第19回 望月六郎
- 第20回 黒沢清／磯村一路

■ 新人監督賞 ■

- 第1回 柳町光男
- 第2回 相米慎二
- 第3回 森田芳光
- 第4回 中原 俊
- 第5回 崔 洋一
- 第6回 金子修介
- 第7回 該当者なし
- 第8回 林 海象
- 第9回 伊藤智生
- 第10回 榎戸耕史
- 第11回 阪本順治
- 第12回 松岡錠司
- 第13回 竹中直人
- 第14回 富岡忠文／松村克弥
- 第15回 天間敏広
- 第16回 渡邊 武
- 第17回 室賀 厚
- 第18回 サブ
- 第19回 三谷幸喜
- 第20回 庵野秀明

■ 脚 本 賞 ■

- 第1回 馬場 当
- 第2回 丸山昇一
- 第3回 荒井晴彦
- 第4回 剣持 亘
- 第5回 森田芳光
- 第6回 伊丹十三
- 第7回 石井 隆
- 第8回 森田芳光
- 第9回 斎藤 博
- 第10回 丸山昇一
- 第11回 斎藤博、崔洋一
- 第12回 じんのひろあき
- 第13回 丸内敏治
- 第14回 周防正行
- 第15回 一色伸幸
- 第16回 田中陽造
- 第17回 伊藤和典
- 第18回 森田芳光
- 第19回 原田真人
- 第20回 君塚良一

■ 自主製作映画賞 ■

- 第1回 家獣（青山定次）
- 第2回 狂い咲きサンダーロード（石井聰互）
- 第3回 風たちの午後（矢崎仁司）
- 第4回 闇打つ心臓（長崎俊一）
- 第5回 竜二（川島透）
- 第6回 該当者なし
- 第7回 血風ロック（流山児祥）
- 第8回 夢みるように眠りたい（林海象）

■ 技 術 賞 ■

- 第1回 仙元誠三（撮影）
- 第2回 永塚一栄（撮影）
- 第3回 安藤庄平（撮影）
- 第4回 田村正毅（撮影）
- 第5回 前田米造（撮影）
- 第6回 前田米造（撮影）
- 第7回 篠田 昇（撮影）／梅林茂（音楽）
- 第8回 佐々木原保志（撮影）
- 第9回 瓜生敏彦（撮影）
- 第10回 高間賢治（撮影）
- 第11回 高間賢治（撮影）
- 第12回 笠松則通（撮影）／梅林茂（音楽）
- 第13回 伊藤昭裕（撮影）／久石譲（音楽）／池谷仙克（美術）
- 第14回 佐々木原保志（撮影）
- 第15回 藤沢順一（撮影）／鏑木創（音楽）
- 第16回 笠松則道（撮影）／梅林茂（音楽）
- 第17回 篠田昇（撮影）／樋口真嗣（特技）
- 第18回 柳島克己（撮影）
- 第19回 阪本善尚（撮影）
- 第20回 長田勇市（撮影）

■ 主演男優賞 ■

- 第1回 緒形 拳
- 第2回 古尾谷雅人
- 第3回 永島敏行
- 第4回 宇崎竜童
- 第5回 松田優作
- 第6回 鹿賀丈史
- 第8回 岩城滉一
- 第9回 時任三郎
- 第10回 真田広之
- 第11回 石橋 凌
- 第12回 古尾谷雅人

- 第13回 赤井英和
- 第14回 本木雅弘
- 第15回 真田広之
- 第16回 奥田瑛二
- 第17回 豊川悦司
- 第18回 役所広司／浅野忠信
- 第19回 原田芳雄
- 第20回 中井貴一／真木蔵人

■主演女優賞■

- 第1回 水原ゆう紀
- 第2回 薬師丸ひろ子
- 第3回 風間舞子
- 第4回 いしだあゆみ
- 第5回 永島暎子
- 第6回 白都真理
- 第7回 原田知世
- 第8回 安田成美
- 第9回 富田靖子
- 第10回 小泉今日子
- 第11回 中川安奈
- 第12回 斉藤由貴
- 第13回 風吹ジュン
- 第14回 南野陽子
- 第15回 鷺尾いさ子
- 第16回 高岡早紀
- 第17回 中山美穂
- 第18回 深津絵里
- 第19回 鈴木京香
- 第20回 原田美枝子

■助演男優賞■

- 第1回 蟹江敬三
- 第2回 風間杜夫
- 第3回 石橋蓮司
- 第4回 平田 満
- 第5回 伊丹十三
- 第6回 高品 格
- 第7回 三浦友和
- 第8回 小林 薫
- 第9回 河原さぶ
- 第10回 片岡鶴太郎
- 第11回 原田芳雄
- 第12回 蟹江敬三
- 第13回 的場浩司
- 第14回 室田日出男
- 第15回 萩原聖人
- 第16回 佐藤浩市
- 第17回 金山一彦
- 第18回 石橋 凌
- 第19回 西村雅彦／尾藤イサオ
- 第20回 大杉 漣

■助演女優賞■

- 第1回 亜 湖
- 第2回 伊藤 蘭
- 第3回 田中裕子
- 第4回 夏目雅子
- 第5回 田中美佐子
- 第6回 志穂美悦子／菅井きん
- 第7回 中井貴恵
- 第8回 渡辺典子
- 第9回 石田えり
- 第10回 本阿彌周子
- 第11回 相楽晴子
- 第12回 中嶋朋子
- 第13回 和久井映見／広田玲央名

- 第14回 清水美砂／荻野目慶子
- 第15回 ルビー・モレノ／水木薫
- 第16回 室井 滋
- 第17回 中山 忍
- 第18回 草村礼子
- 第19回 片岡礼子
- 第20回 吉行由実

■新人賞■

- 第1回 本間優二／熊谷美由紀
- 第2回 荻野目慶子／山田辰夫
- 第3回 蛭川有紀／趙方豪／忍海よしこ
- 第4回 中村れい子／坂上とし恵／小林聡美
- 第5回 原田知世／宇沙美ゆかり
- 第6回 工藤夕貴／富田靖子／吉宮君子
- 第7回 速水典子／大西結花／上原由恵
- 第8回 原田貴和子／仲村トオル／今井美樹
- 第9回 白島靖代／秋吉満ちる／前川麻子
- 第10回 男闘呼組／橘ゆかり
- 第11回 赤井英和／川原亜矢子
- 第12回 牧瀬里穂／高岡早紀／中島ひろ子
- 第13回 石田ひかり／大島弘子／サブ(田中博樹)
- 第14回 豊川悦司／大森嘉之／墨田ユキ
- 第15回 岸谷五朗／遠山景織子／田畑智子
- 第16回 佐伯日菜子／松岡俊介／夏川結衣
- 第17回 鈴木砂羽／片岡礼子／酒井美紀
- 第18回 安藤政信／Chara／草刈民代
- 第19回 広末涼子／佐藤仁美／佐藤康恵／岡元夕紀子
- 第20回 田中麗奈／麻生久美子／三輪明日美

■特別大賞■

- 第1回 宮下順子／山本晋也
- 第2回 松田優作
- 第3回 高倉健／加藤泰
- 第4回 中川信夫／松坂慶子
- 第5回 前田陽一／角川春樹
- 第6回 吉永小百合／鈴木則文
- 第7回 神代辰巳／倍賞美津子
- 第8回 岡本喜八
- 第9回 森田健作
- 第10回 該当者なし
- 第11回 該当者なし
- 第12回 若松孝二／原田芳雄
- 第13回 該当者なし
- 第14回 深作欣二
- 第15回 石井輝男
- 第16回 森崎 東
- 第17回 関本郁夫
- 第18回 渡 哲也
- 第19回・第20回 該当者なし

■審査員特別賞■

- 第5回 故・金子正次
- 第8回 「沙耶のいる透視図」のスタッフ
- 第9回 「ちょうちん」のスタッフ
- 第10回 南雲佑介
- 第11回 故・松田優作
- 第12回 該当者なし
- 第13回 大友克洋
- 第14回 「死んでもいい」のスタッフ
- 第15回 J・MOVIE・WARS
- 第16回 ビターズ・エンド、ユーロスペース
- 第17回 「SCORE」軍団
- 第18回 林海 象
- 第19回 「シャ乱Qの演歌の花道」
- 第20回 「踊る大捜査線 THE MOVIE」の製作チーム
故・前田陽一

ヨコハマ映画祭ベストテン足跡

第1回 (79年度)

- ①太陽を盗んだ男 ②赫い髪の女 ③天使のはらわた・赤い教室 ④もっとしなやかにもっとしたたかに ⑤復讐するは我にあり ⑥その後の仁義なき戦い ⑦十九歳の地図 ⑧天使の欲望 ⑨濡れた週末 ⑩Keiko

第2回 (80年度)

- ①ツイゴインルワイゼン ②翔んだカップル ③狂い咲きサンダーロード ④野獣死すべし ⑤二百三高地 ⑥ヒポクラテスたち ⑦おんなの細道・濡れた海峡 ⑧神様のくれた赤ん坊 ⑨鉄騎兵、跳んだ ⑩ルパン三世・カリオストロの城

第3回 (81年度)

- ①の・ようなもの ②狂った果実 ③遠雷 ④ガキ帝国 ⑤陽炎座 ⑥泥の河 ⑦幸福 ⑧駅・STATION ⑨炎のごとく ⑩風たちの午後

第4回 (82年度)

- ①転校生 ③蒲田行進曲 ③ TATOO [刺青] あり ④さらば愛しき大地 ⑤ウィークエンド・ジャッフル ⑥水のないプール ⑦誘拐報道 ⑧ハイティーンブギ ⑨キャバレー日記 ⑩セーラー服と機関銃

第5回 (83年度)

- ①家族ゲーム ②時をかける少女 ③竜二 ④俺っちのウェディング ⑤魚影の群れ ⑥夜をぶっとばせ BLOW THE NIGHT! ⑦十階のモスキート ⑧細雪 ⑨ダブルベッド ⑩戦場のメリークリスマス

第6回 (84年度)

- ①麻雀放浪記 ②お葬式 ③風の谷のナウシカ ④人魚伝説 ⑤チ・ン・ピ・ラ ⑥瀬戸内少年野球団 ⑦さらば箱舟 ⑧逆噴射家族 ⑨ときめきに死す ⑩すかんぴんウォーク

第7回 (85年度)

- ①ラブホテル ②台風クラブ ③Wの悲劇 ④さびしんぼう ⑤早春物語 ⑥それから ⑦友よ、静かに眠れ ⑧生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言 ⑨みんなあげちゃう ⑩銀河鉄道の夜

第8回 (86年度)

- ①ウホッホ探検隊 ②コミック雑誌なんかいらない! ③彼のオートバイ彼女の島 ④雪の断章-情熱- ⑤犬死にせしもの ⑥ビー・バップ・ハイスクール ⑦沙耶のいる透視図 ⑧天空の城ラピュタ ⑨ジャズ大名 ⑩そろばんずく

第9回 (87年度)

- ①ゆきゆきて、神軍 ②BU・SU ③トットチャンネル ④永遠の½ ⑤ちょうちん ⑥恋人たちの時刻 ⑦恋する女たち ⑧本場ちょしこうマニュアル・初恋微熱篇 ⑨光る女 ⑩ゴンドラ

第10回 (88年度)

- ①ロックよ、静かに流れよ ②となりのトトロ ③・ふ・た・り・ぼ・っ・ち・ ④異人たちとの夏 ⑤リボルバー ⑥快盗ルビイ ⑦この胸のときめきを ⑧1999年の夏休み ⑨ラスト・キャバレー ⑩火垂るの墓

第11回 (89年度)

- ①どついたるねん ②その男、凶暴につき ③Aサインデイズ ④キッチン ⑤魔女の宅急便
⑥誘惑者 ⑦どっちにするの。 ⑧出張 ⑨社葬 ⑩黒い雨

第12回 (90年度)

- ①櫻の園 ②われに撃つ用意あり ③バタアシ金魚 ④3-4×10月 ⑤鉄拳 TEKKEN
⑥つぐみ TUGUMI ⑦宇宙の法則 ⑧てなもんやコネクション ⑨さらば愛しのやくざ ⑩香港
パラダイス

第13回 (91年度)

- ①あの夏、いちばん静かな海。②無能の人 ③王手 ④大誘拐・RAINBOW KIDS ⑤ふたり
⑥ワールド・アパートメント・ホラー ⑦風、スローダウン ⑧息子 ⑨夢二 ⑩獅子王たちの夏

第14回 (92年度)

- ①シコふんじゃった。②いつかギラギラする日 ③青春デンドケデケデケ ④死んでもいい ⑤きら
きらひかる ⑥寝盗られ宗介 ⑦ザ・中学教師 ⑧12人の優しい日本人 ⑨湾岸バッド・ボーイ・ブ
ルー ⑩ありふれた愛に関する調査

第15回 (93年度)

- ①月はどっちに出ている ②お引越し ③ソナチネ ④僕らはみんな生きている ⑤わが愛の譜・
滝廉太郎物語 ⑥ゲンセンカン主人 ⑦眠らない街・新宿鮫 ⑧病院で死ぬということ ⑨はるか、
ノスタルジィ ⑩教祖誕生

第16回 (94年度)

- ①トカレフ ②居酒屋ゆうれい ③忠臣蔵外伝・四谷怪談 ④800 TWO LAP RUNNERS ⑤棒の
哀しみ ⑥119 ⑦ヌードの夜 ⑧夏の庭 The Friends ⑨全身小説家 ⑩夜がまた来る

第17回 (95年度)

- ①Love Letter ②ガメラ・大怪獣空中決戦 ③愛の新世界 ④KAMIKAZE TAXI ⑤GONIN
⑥無頼平野 ⑦BOXER JOE ⑧東京兄妹 ⑨あした ⑩SCORE

第18回 (96年度)

- ①キッズ・リターン ②Shall we ダンス? ③岸和田少年愚連隊 ④(ハル) ⑤ビリケン ⑥ト
キワ荘の青春 ⑦お日柄もよくご愁傷さま ⑧シャブ極道 ⑨ガメラ2・レギオン襲来 ⑩おかえり

第19回 (97年度)

- ①鬼火 ②バウンス ko GALS ③傷だらけの天使 ④ラヂオの時間 ⑤ポストマン・ブルース
⑥誘拐 ⑦シャ乱Qの演歌の花道 ⑧東京日和 ⑨ひみつの花園 ⑩もののけ姫

第20回 (98年度)

- ①CURE キュア ②がんばっていきまっしょい ③HANA-BI ④愚か者 傷だらけの天使 ⑤愛を乞
うひと ⑥犬、走る DOG RACE ⑦ラブ&ポップ ⑧リング ⑨踊る大捜査線 THE MOVIE
⑩中国の鳥人

編集後記

「CURE キュア」と「がんばっていきまっしょい」の一騎撃ちは見ごたえがあった。

特に「がんばっていきまっしょい」のラスト、ボートのレースシーンは忘れることができない。

私たちはこの作品の少女たちにどうしてこうまで心ひかれるのだろうか？、腕も脚もまるで蚊とんぼみたいな、およそ運動部とは無縁に思えるにわかボート部員たちの“敗者復活戦”に共感でき、その描かれ方に納得がゆくのもひとえに、作品世界を完璧にコントロールしきった磯村監督の演出力によるものだと思う。まず絵作りの感覚のシャープネス、カメラ位置の正しさがテーマをひととき鮮明にするのに貢献している。少女たちの日常生態にあまりベッタリ密着せず、程良い距離感で見つめるクールさが、クライマックスの感動をこの上なく高めるのだ。

ある方から頂いた年賀状に、「ヨコハマの選考は今年もキマっています。特に『がんばっていきまっしょい』への評価と磯村さんの監督賞が輝いて見えます。」とあった。

磯村一路さんの監督賞は、多くの映画ファンが待ち望んでいた当然の受賞なのだ。

一方の「CURE キュア」は開巻からいきなりフルスロットルで、そのボルテージは一度も落ちることなく駆けぬけてしまった印象がある。人間の裏面の真実に迫る怖さといったら、映画史が未だかつて到達しえなかったレベルの高さにあると思う。これに近いものを強いて一本上げるとすれば、石井輝男監督作品「明治・大正・昭和 猟奇女犯罪史」があるだけだ。

映画のなかで人間を見つめるということは、勢いのある物語展開の中にも考えながら読みといてゆくのには十分な仕掛けがなくてはならない。「CURE キュア」は、脚本の巧さだけでなく、映像の構成要素（空間の拡がり、奥行。色彩や音響も。小道具を含めた事物のディテールに到るまで…）の全てが観客の五感に訴えかけ、ことのおこりに立ち会わざるをえなくなるリアルさが大きな波動となって襲いかかってくるのだ。考えながら

観終った時に、怖さと同時にある昂揚感に促われ、むしろ爽やかな映画体験を味わえることとなる。これはとにかくすごいことだと思う。

「CURE キュア」作品賞と同時に黒沢清さんの監督賞は至極当然なのだ。そしてふたりの監督の同時受賞。さすがにわが選考委員の票はまことに適格である。こうした場合のWの印象は重みを増しこそすれ、軽んじられてはならないものだと思う。

もう一本の気になる映画「愛を乞うひと」については、ひとつ私の視点に欠けていた何かを田中千世子氏の論の中に見出すことが出来た。教えられることが多い。「愛を乞うひと」を再度劇場で見なければと今からワクワクしている。

20周年に寄せてお祝いのメッセージを多くいただいた。どなたのお言葉にも「ヨコハマ」を「日本映画」を愛し支持する濃やかな情があふれ出ていて感激させられる。過ぎたおホメだなど思える部分もなきにしもあらずだが、このような励みがあればこそ一回また一回とステップアップして行けるのも事実なのだ。

荒井晴彦さん、私たちは「反権威」を標榜したことはただの一度もなく、イイものはイイ、面白いものは面白いと本音で映画に対しようとしてきた結果が、そのように受け止められているのかもしれない。これも目利きにすぐれた選考委員の皆さんがあったればこそ…。年齢に関係なく、「精神の若手の持続を！」は決してなくすものではありません。熱い思い然と受け止めましたぜ！みなさんありがとうございます。

(北見)

お蔭様をもちまして20歳の誕生日を迎えることとなりました。いろんな想いが交錯しますが、今ボクは第9回ヨコハマ映画祭で作品賞を受賞された「ゆきゆきて、神軍」の小林佐智子プロデューサーの受賞コメントを思い出します。

「全く素手の無一文から、映画を作るということは、素敵です。どんなに振り返っても、苦しいことは一つもありません。そして、あたたかいものばかりが残っています。それを思うたび、いつも新しく心を揺さぶられます。

私たちの映画は、はたしてどこまで、あふれるような想いを受けて立つことができたでしょうか。

いくら厳しくても厳し過ぎることがないように気持ちになります。(後略)」

“映画”という部分を“映画祭”に変えれば、そのまま今のボクの心境になります。

20年目の20回目、お世話になった皆様に口にしきれぬありがたい気持ちをお伝えしたいと思います。

(鈴木)



ヨコハマ映画祭実行委員会

代 表	鈴木	たけし
副 代 表	林	眞木夫
実行委員長	北見	秋満
	斎藤	芳子
	北川	浩二
	三浦	武夫
	繁田	健治
	加藤	功
	野村	真哉
	林田	隆行
	風本	勇典
	遠藤	和里
	伊藤	美由美
	牧野	真由美
	富田	牧子
	外館	さつき
	長田	和美
	有村	麻由美
	橘	由美子
	真木	晴恵
	山田	悦子
	小室	あづさ
	安斉	直子
	岩根	由佳
	青木	友美
	久世	久美子
	峯岸	俊子
	藤村	慎也
	原野	領子
	久保田	忍彦
アドバイザー	鶴飼	邦彦
	小野	善太郎
顧問	井上	温明
参与	折井	美代子
審査委員長	金子	正且

第20回 ヨコハマ映画祭

1999年2月7日発行

編集兼 発行人 「ヨコハマ映画祭」実行委員会

印刷所 株式会社 イース

【日本映画から外国映画まで、ホットな新旧作品論・作家論が満載】

- 映画のツワモノたちによる〈98ベストテン特集〉
- アンケート『黒澤明監督と私』クロサワの遺したもの
- 松田優作・加藤泰・木下恵介さんの連載記事
- 淀川長治さん追悼
- 『ヨコハマ映画祭』オールスター・キャストの執筆陣
(金子審査委員長、鈴木代表、北川れい子嬢、野村正昭氏、石原郁子嬢、小張アキコ嬢 etc.)

シネマ・パラダイス

服部 宏 著

鎌倉を愛した 小津安二郎，横浜ゆかりのトップスター 原 節子，岸 恵子，脚本家の 内館牧子，時代の先端を行くヨコハマ映画祭…… 神奈川ゆかりの人と作品にまつわるエピソードを中心に，映画と映画人と映画を愛する人にささげた50話。

定価 本体 1,400円

◎ 発行 神奈川新聞社 ◎ 発売 かなしん出版

第24回 おおさか映画祭

99年2月21日(日) 守口文化センター

★個人賞★

- 作品賞：「HANA-BI」
- 監督賞：平山 秀幸「愛を乞うひと」
- 主演男優賞：渡 哲也「時雨の記」
- 主演女優賞：原田美枝子「愛を乞うひと」
- 助演男優賞：大杉 漣「CURE キュア」
「犬、走る DOG RACE」
「アンラッキーモンキー」
「がんばっていきまっしょい」
「HANA-BI」
「愚か者 傷だらけの天使」他
- 助演女優賞：小泉今日子「踊る大捜査線 THE MOVIE」
- 新人監督賞：中野 裕之「SFサムライフィクション」
- 新人賞：田中 麗奈「がんばっていきまっしょい」
野波 麻帆「愛を乞うひと」
三船 美佳「友情」
麻生久美子「カンゾー先生」
- 自主制作賞：高岡 茂「ベイビー・クリシュナ」
- 脚本賞：鄭 義信「愛を乞うひと」「犬、走る DOG RACE」
- 撮影賞：長田 勇市「がんばっていきまっしょい」
- 音楽賞：布袋 寅泰「SFサムライフィクション」
- 特別賞：山下 耕作
- 特別功労賞：俊藤 浩滋
- 話題賞：龍村 仁

1998年ベストテン・個人賞

★日本映画ベストテン★

1. HANA-BI (北野 武)
 2. 愛を乞うひと (平山秀幸)
 3. がんばっていきまっしょい (磯村一路)
 4. 愚か者 傷だらけの天使 (阪本順治)
 5. 時雨の記 (澤井信一郎)
 6. リング (中田秀夫)
 7. CURE キュア (黒沢 清)
 8. 犬、走る DOG RACE (崔 洋一)
 9. ねじ式 (石井輝男)
 10. 絆 (根岸吉太郎)
- 次点 カンゾー先生 (今村昌平)
SFサムライフィクション(中野裕之)
踊る大捜査線 THE MOVIE(本広克行)

